

瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業
に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告

柿川内第Ⅰ遺跡
柿川内第Ⅱ遺跡

1 9 7 6

宮崎県教育委員会

例　　言

1. 本調査報告書は、県西諸県農林試験局の瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴なう事前緊急発掘調査として宮崎県教育委員会が、昭和51年11月8日から同月26日まで実施した西諸県郡野尻町大字三ヶ野山柿川内第1・第2遺跡の報告書である。
2. 本稿の執筆は、第1遺跡を野間重孝、第2遺跡を石川恒太郎が担当した。
3. 掲載の実測図・写真は、野間・石川がそれぞれ作成した。
4. 本調査にあたっての調査計画は、県教育委員会文化課課長補佐寺原俊文、同主事若永哲夫があつた。報告書の編集・発行についても文化課が中心となり、調査員の助力を得て行なった。

調査関係者

調査主体・宮崎県教育委員会

教 育 長 穂 槙 正 喜
文 化 課 長 日 高 三 好

調査員

石 川 恒 太 郎 (県文化財保護審議会委員)
野 间 重 孝 (宮崎市教育委員会社会教育課主事)

調査担当

文化課長補佐 寺 原 俊 文
同 主事 岩 永 齐 夫

調査協力者

野尻町教育委員会
県西諸県農林振興局
真 方 良 穂 (前高原町立広原小学校長)

はじめに

瀬戸ノ口地区における特殊農地保全整備事業は昭和48年から続けられているが、それにともない埋蔵文化財の緊急発掘調査も第3次調査を終了している。これらについては、「大荻遺跡(1)、(2)」として、報告書が刊行^{注(1)}である。

今回は、第4次調査として柿川内第Ⅰ遺跡と柿川内第Ⅱ遺跡の調査を昭和51年11月8日から、27日までの20日間の調査日程で実施した。

過去の調査では、地下式横穴群、土壙墓群、弥生時代の住居跡と多大な成果をあげているが、今回の柿川内第Ⅰ遺跡の調査では、縄文時代前期にあたる曾畠式土器の単純遺跡の調査となった。また、石川調査員の参加もみたので、以前の分布調査によって確認されていた柿川内第Ⅱ遺跡の調査も併行して実施することになった。この遺跡は、柿川内第Ⅰ遺跡の南西に位置し、一段下がった平坦な台地に営まれている。

以下柿川内第Ⅰ遺跡の報告を野間が行ない、柿川内第Ⅱ遺跡の報告を石川調査員が報告する。

柿川内第Ⅰ遺跡



本文目次

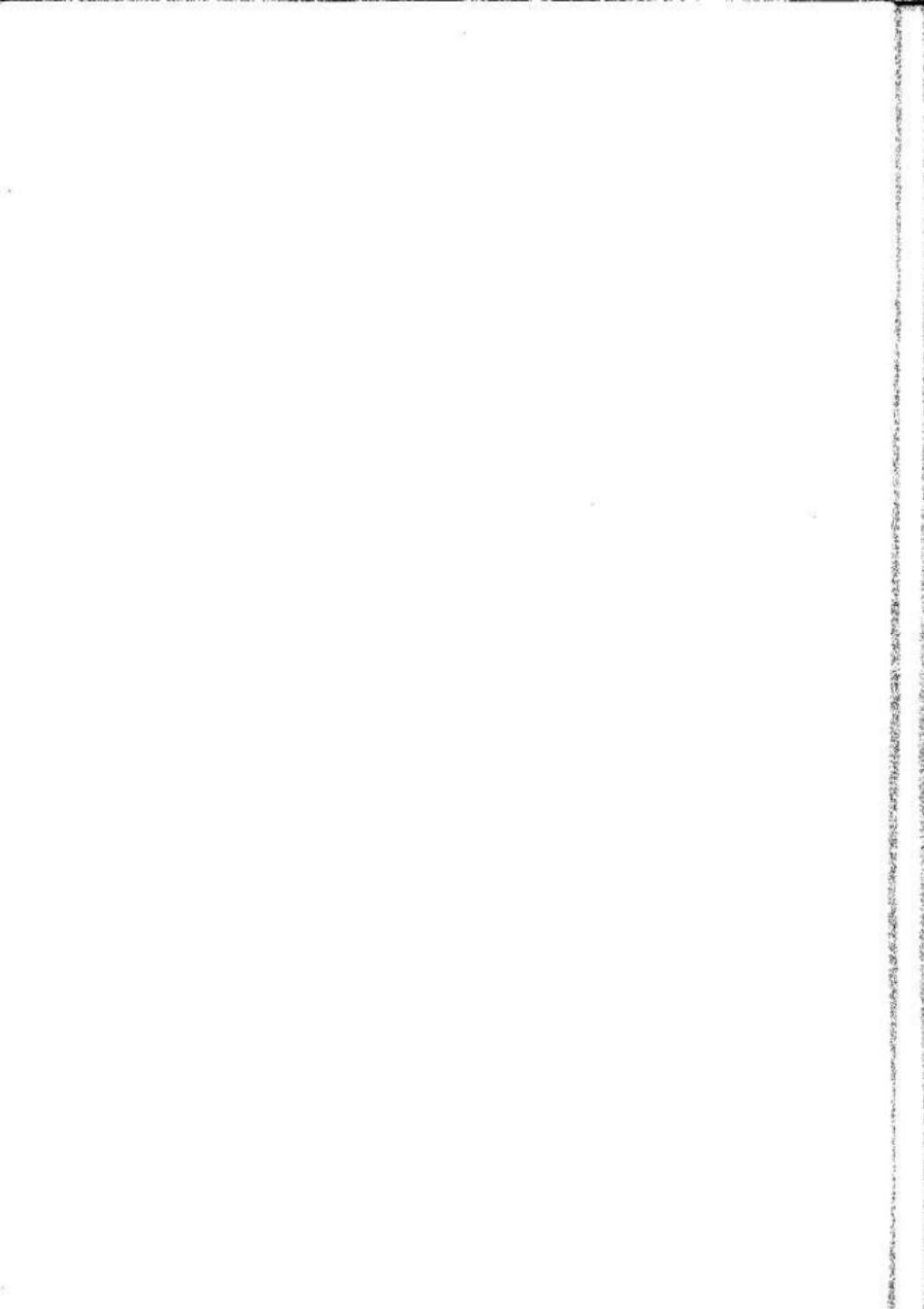
第1章 遺 跡	(1)
1. 遺跡付近の環境	(1)
2. 調査の経過	(1)
3. トレンチと遺跡の広がり	(2)
4. 層 位	(3)
第2章 土 器	(4)
1. 器 形	(4)
2. 文 様	(5)
第3章 石 器	(8)
1. 刮片石器	(8)
2. 破石器	(10)
第4章 考 察	(12)

挿図目次

第 1 図	柿川内遺跡周辺地形図 (I)	(15)
第 2 図	柿川内遺跡地形図 (II)	(16)
第 3 図	柿川内第 I 遺跡発掘区図	(17)
第 4 図	a-2, a-3, b-2, b-3区出土状況	(18)
第 5 図	A-2, A-3, B-2, B-3区出土状況	(19)
第 6 図	A-1, A-2区、西壁土層断面図	(20)
第 7 図	曾畠式土器口縁部拓影	(21)
第 8 図	曾畠式土器口縁部及び胴部拓影	(22)
第 9 図	曾畠式土器底部、有補修孔土器片、その他の土器胴部及び底部	(23)
第 10 図	剥片石器 (石鏃、彫器)	(24)
第 11 図	" (小型尖頭器、石匙、石錐、剥片石器 a 形)	(25)
第 12 図	" (剥片石器 a 形・b 形・c 形、石核)	(26)
第 13 図	碌石器 (石斧、石鍤、敲き石)	(27)
第 14 図	" (敲き石、石皿)	(28)

図 版 目 次

図 版 1	柿川内第1遺跡近景 (1)	(29)
図 版 2	" (2)	(29)
図 版 3	A-1、A-2区西壁土層	(30)
図 版 4	B-3区出土状況	(30)
図 版 5	出土の土器 (深鉢第1類)	(31)
図 版 6	" (" 2 ")	(32)
図 版 7	" (小型深鉢、浅鉢)	(33)
図 版 8	" (胴 部)	(34)
図 版 9	" (深鉢胴部、浅鉢胴部、有補修孔土器片)	(35)
図 版 10	" (土器底部、底部接続面土器)	(36)
図 版 11	その他出土の土器	(37)
図 版 12	剥片石器 (石鏃、彫器、小型尖頭器、石錐)	(38)
図 版 13	" (石匙、剥片石器 a 形・b 形・c 形、石核)	(39)
図 版 14	砾石器 (石斧、石錐、石皿、破き石)	(40)



第1章 遺跡

1. 遺跡付近の環境（第1図）

大荻台地は大字三ヶ野山に属し、国道268号線の南側に岩瀬川から3段の河岸段丘を形成している。第3段丘の平坦な台地は、標高195m～201mの広大な畑地で、以前の調査で確認された地下式横穴群や県指定古墳、弥生時代終末期の土壙墓群が分布している。第2段丘は、岩瀬川に寄って1段下がった標高168m～170mの台地を形成している。この台地は小さな谷間の切り込みによって4区に分けることができる。これらは先の調査でG.H.I.J区と区分しており、G区においては昭和15年度の調査によって弥生時代の住居跡群を確認している。

赤柿川内第I遺跡は、第3段丘に属し、標高196m内外を示している。遺跡は以前の調査区から小谷を隔てた東方に位置し、東から西に延びる小舌状丘地に、九州電力の送電鉄塔の立つ畑地一区間に営まれている。小舌状丘地の北側は、急傾斜の斜面となって岩瀬川に注ぐ小溝をともなって谷間を形成している。この谷間は湧水が豊富で枯れることがないとのことである。

また、南側はゆるやかな傾斜をもちらながら第3段丘の最も低い畑地へと続いている。その麓部に現在4～5戸の集落が営まれており、集落の前に広がる畑地に柿川内第II遺跡が立地している。そうした平坦な畑地から1段下がって赤柿川内に通じる道路を挟んで南側に第2段丘が広がり、その両端は岩瀬川の谷間へと急傾斜で落ちていく。

2. 調査の経過（第2図）

瀬戸の口地区における県営特殊農地保全整備事業は、今年も4年次として柿川内地区が整備されることになった。かかる事業内に柿川内第I遺跡の存在が知られていた。

この遺跡は、以前畠地開墾の際にブルドーザーによって約60cmが削平され、そのときに多量の土器片、石器及び石器片が露出したことであり、地元の宮崎考古学会会員、真方良忠氏によって、遺跡の確認が成されていたところである。

そこで、本調査は昭和51年11月8日から11月26日まで実施した。

以下、日を追って概略を記す。

8日、天候は晴れであった。調査地点は第3段丘に属し、そのなかでも標高196m前後を示す高い位置に存在する小丘陵である。その小丘陵は、主軸をW40°Nと、ほぼ東西の方向に延びており、断面は弧状を呈している。

まず、遺物の包含範囲を知るうえから、この小丘陵を横断するかたちで、主軸Aトレンチを、幅2m、長さ51mを設定し、それを各3mごとに区切り、17区に分けて層位確認を行なった。

9日、天候は晴れであった。昨日に引き続きAトレンチの調査を行なうとともに、A-3区において、遺物の包含が良好なために、その3区を東に1まで延長し、D-3区、F-3区、H-3区を調査することにした。しかし、3区の延長においては、遺物の包含が思わしくなく短時間で無遺物層である橙色火山灰砂質層まで掘り進んだため、c'-3、c'-4区とm-6、k-6区を設定し調査を始めた。

10日、始業時からどんよりとした天候であり、昨日設定したトレントの作業を進めたが、10時頃から雨足が強くなつたため作業は中止した。

11日、天候は、くもりであった。新たに、a-3、a-4、b-3、b-4区とC-11、C-12区の調査に入った。a、bの3、4区においては、遺物の包含が良好であるが、C-11、12区においては、遺物の出土が少量であった。

12日、天候は晴れであった。a-2、b-2、c'-2区の調査とh-10、j-10、l-10区及び、B-11、B-12区の調査を進めた。a～c'の2区においては、遺物の出土が多く、h～lの10区においては、かなり少量の遺物しか出土しない状況であった。また、B-11、12区においては、遺物の出土は少量であるが良好な状態であった。

13日、天候は、くもりのち雨であった。A-2区周辺でかなり良好な遺物の包含があるため、B-2区の調査にかかった。また、c'-10、d-10、e-10、f-10区も同時に調査を進めた。c'～fの10区においてもかなり良好な状態で遺物を包含しているようである。この日は、土曜日でもあり、作業は午後3時で終了した。

14日、日曜日のため作業は休んだ。

15日、天候は、晴れであった。c'～fの10区において、良好な土器の包含をみるために、c'-11、d-11、e-11、f-11区の調査にかかった。これらの区においても、10区と同じような状態で遺物の包含をみることができた。

以上を今調査における発掘調査区として、以後は、各区の完全露出と状況観察を行なった。

16日、天候は、晴れのちくもりであった。各区の発掘調査と並行して、遺物露出の終了した各区の平面図を作成するため、BM（ペンチャーマーク）の移動や水系のセット等の作業を進めた。また、石川調査員の参加もあったので、柿川第Ⅱ遺跡の調査も並行して行なうことになった。

17日、朝から雨足が強く作業は中止した。しかし、柿川内第Ⅰ遺跡については、調査区域が広大なことと、調査期間が限られていたため、ブルドーザーによる表土はぎを行なうことになり、雨の中、調査員のみが、現場にて表土はぎの指示を行なった。

18日、19日の両日は、各区の遺物分布状況の平面図作成を行なう。

20日、21日は、主な遺物についてはマークするとともに、レベルをとりながら遺物のとりあげを行なつた。

22日、23日、遺物のとりあげも終り、周辺地域の地形図作成を200分の1の縮尺で行なった。

24日、最後に土層図の作成を行ない、午後3時ごろ第Ⅰ遺跡縁ての調査を終了することができた。

3. トレントと遺跡の広がり (第3・4・5図)

調査対象とした地点は、東西50m、南北50mの約250m²の畠地であったが、本来ならば全面発掘を行うことが望まれるところであるが、調査期間も限られていたため、トレント調査法を用いることにした。そこで、まず地形断面が弧状を呈するため、小丘陵を横断する形で主軸Aトレントを2m×51mで設定し、それを各3mごとに区切り、17区を設定した。それにともない西の方向をスマールアルファベットにより、a～mの13トレント、東の方向をB～Iの8トレントを設定し、それぞれを17区に区切るグリッドを

組み、主軸Aトレンチの出土状況をみながら各トレンチの各区を延長、拡大する形で調査を進めていった。各調査区については、前項で記述したため省略する。各区の調査状況からみると、旧地形が小丘陵を成し、断面がやや平坦で弧状を呈し、南側傾斜面が、かなりの傾斜をもっていたようである。そのため、畠地としての開墾の際に最も高い位置を削除して、南側の傾斜面に堆土したことがうかがわれる。

最も高い位置は、各トレンチの6～9区であり、この位置は、開墾の際に包含層まで完全に削除されており、耕作土約25cm～35cmの下には、橙色火山灰砂質層が露出する。

南側傾斜面になると包含層まではかなり深く、包含層の傾斜角度も大きい。したがって出土遺物も希薄な感がする。

北側包含層の傾斜角度はゆるやかで、遺物の包含も良好であり、この地点では、包含層を確実にとらえることができた。

以上のことから、遺物の広がりは、南北にはAトレンチの2区から12区の範囲に、東西には、h-10区とCトレンチの10、11、12区を結ぶ橢円形状の範囲にあるものと思われる。

また、高い位置の遺跡主体部は前述のように削除されており、惜しい限りである。したがって、調査では、遺構の検出はみなかった。ただ、A-3区において、径25cm×20cm、深20cmのピットが1個検出されているが、周囲に関連するものがなく判然としない状況にある。柿川内第I遺跡については、遺物包含範囲が狭く、層位的にも包含層は1層である。このことから縄文時代前期における1時期の単純遺跡であることがいえるのではなかろうか。

4. 層位（第6図）

この遺跡の主要部は、畠地開墾の際に削除されており、層位的な観察はできなかったが、Aトレンチの西側断面において観察することができた。それによると、A-12区の中央あたりから南側と、A-2区の北側よりの部分にまで削除前の第I層の地表面を観察することができる。第I層は高崎スコリア層である。第II層は、黄色小粒混入土層であり、A-11区の中央部から南とA-2区の中央部よりの北側にみると、その上、下の層面には遺物をみない。また、この層は細分すると、北側傾斜層においては、濃・淡の2層に分けることができるが、南側傾斜層については、それをみなない。

6、7、8区においては、黒褐色土層も削平されており、みることができない。

第V層は、橙色火山砂質土層が30cm内外の厚さで入り、第VI層は、青灰色硬砂層が入る。

第2章 土 器

柿川内第1遺跡から発掘された土器片は、数点の粗製土器を除いて、全てが曾畠式土器としてみて良いものであろう。また、出土層についても第IV層の黒褐色土層の中層に包含されており、単純遺跡の性格を強くもつものである。

形態的には、深鉢、小型深鉢、浅鉢の3タイプに分類することができ、施文様的にも刺突文と沈線文を主体とする組み合せ施文であることがうかがえる。胎土についても、黒褐色を呈するものと褐色を呈するものとに分けられ、黒褐色を呈するもののみに数点の滑石を含むものがみられ、大部分の土器片には滑石を含まない。

また、第9図(1)(2)のように、表から穿孔した、補修孔のみられる土器片が数点出土している。

1. 器 形

深 鉢 (第7、8図)

口径20cm内外を示し口縁部が胴部へと直行するものがほとんどであるがNo.9、12、21、22のように、やや外反するものがみられ、外反するものについては、やや薄手のものに多くみられる。また、薄手口の縁部は平縁であるが、厚手の口縁部は波状口縁を成すものと平縁を成すものとに分けることができるようである。

胴部にいたっては、やや膨らみをもち、厚みが0.6cm内外の薄さになり、そのまま円底の底部へと移行している。

小型深鉢 (第7、8図)

口径15cm内外を示すものが大部分であるがNo.18のように口径が9cmと極小型のものもみられるようである。

口縁部は、厚手のものが胴部へと直行するものに対し、薄手のものは、ほとんどがやや外反し、胴部で膨らみをもって円底へと移行しており、深鉢と酷似する傾向にある。また、深鉢には、波状口縁を成すものがみられるが、小型深鉢についてはみられない。

浅 鉢 (第7、8図)

浅鉢については、その出土例が少ない。口径は、大きいもので19cmを示し、口縁部がすべて外反し、肩部が張って円底の底部へと移行している。

当遺跡の土器成形法についてみると、まず底部となるくぼみの円底をつくり、それに粘土帯を輪積みにして成形したものと思われる。このことは、一見して口縁部と思われる破片が出土していることである。これは、円底と胴部の立ちあがりの接合部分であり、円底と胴部との切離状況を良く残している。

その他の土器（第8図25、26）

今調査において、口縁部2点、胸部3点、底部よりの胸部2点、底部3点の粗製深鉢と思える土器片を検出している。これらの上層は、上部の擾乱層から最も多く検出されており、底部については、第Ⅱ層の漆黒色土層の下部及び、第Ⅳ層の黒褐色土層上面において検出されている。したがって、第Ⅳ層の中層から出土する曾畠式土器には共伴しないものと思える。

底部をみるかぎり、はり付けのあがり底と平底がみられることから縄文中期～後期に位置付けられるものと思われ、様式については判然としない。

2. 文様

文様については、沈線を主体にするものと、沈線と烈点文を組み合せた文様に大別することができ、沈線の施し方によって、文様の細分化ができるようである。（注2）

口縁部文様

1 類（第7図1～14）

沈線文を主体とするものであり、口唇部に斜行押捺をもつものともたなもいのに分類できる。

No.1、浅鉢であり、肩部への張りの接点で折れている。口唇部に細長のヘラ状の先端で刺突した斜行の刺突文を配し、表には、短線列文を6列、内側にも同じように短線列文を7列施文し、表裏とも深く、強い短線列文である。胎土は黒褐色を呈する。

No.2、深鉢で口唇部にヘラの側面で押捺した列点文を配しており表に短線列文を4列施し、その下に斜行綱列文を施している。内側には、ややみだれた短線列文を施文している。胎土は黒褐色を呈し、滑石を少量含む。

No.3、厚手の深鉢であり、波状口縁を成すものである。口唇部には施文ではなく、表裏ともにかなり粗雑な短線列文を施文している。胎土は、灰褐色を呈する。

No.4、薄手の深鉢であり、口唇部には、浅い斜行押捺による列点文を施し、表裏ともに、短線列文を施文している。胎土は灰褐色を呈する。

No.5、深鉢であり、口唇部に施文ではなく、表にかなり深い短線列文を施し、内側には、口唇部に近いところのみに短線列文を施文している。胎土は黒褐色を呈する。

No.6、口縁部のかなり外反する小型深鉢である。口唇部に斜行押捺の列点文を施し、表には縦列格子文を施し、内側は短線列文を施文している。胎土は褐色を呈する。

No.7、口縁部が外反する小型深鉢である。口唇部には押捺列点文を施し、表裏ともに波状横線文を施している。胎土は灰褐色を呈する。

No.8、薄手の小型深鉢である。口唇部には、角のある施文具による押捺列点文を施し、表の上部に縦引きの列点文と横引きの短線文を組み合せ、その下に横線文を1本施し、その下に斜行線を施す特異な文様構成を成している。内側には2本のややみだれた横線文を2本施文している。胎土は黒褐色を呈する。

No.9、薄手の深鉢であり、口縁部は、やや波状を成すものと思われる。口唇部は内側よりに押捺烈点文

を施している。表は縦引きの短線を横列にし、それに斜行沈線を組み合せている。

内側は、横線列文と縦短列文を組み合せた文様構成になっている。胎土は黄褐色を呈する。

No.10、厚手の深鉢である。口唇部には、施文ではなく、表に浅い横線文を三重に施している。内側は口唇部に近い上部に細い沈線を施文しているのみである。胎土は黒褐色を呈する。

No.11、薄手の浅鉢である。口唇部外側に浅い刺突文を施している。表は、かなりシャープな短線列文を施文し、短線烈文間に縦列の短線列文を施文している。内側も、かなりシャープな短線列文を施文している。胎土は黄褐色を呈する。

No.12、薄手の深鉢であり、口縁部がやや外反する傾向にある。口唇部内側に浅い押捺列点文を施している。表は上部3列の短線列文を施し、その下に縦列横線を施文している。内側には2本の浅い横線文を施文している。胎土は、灰褐色を呈し、表面には煤がかなり付着している。

No.13、薄手の深鉢であり、口縁部がやや外反する傾向にある。口唇部には施文ではなく、表に縦列の沈線が粗雑に施文されているのみであり、内側には何ら施文が施されていない。胎土は褐色を呈し、表面に煤が付着している。

No.14、薄手のかなり大型の深鉢である。口唇部には施文ではなく、表裏ともに細い横線文を施文しているのみである。胎土は灰褐色を呈する。

2 類（第7、8図、15～24）

刺突文のみと刺突文と沈線文を組み合せたものとに分類することができ、この2類においては、口唇部に無施文のものではなく、刺突文か押捺文を施文している。

No.15、厚手の深鉢であり、口縁部は波状口縁を成すものである。口唇部中央に浅い沈線を施し、それを挟んで内外に刺突の列点文を施文している。表は刺突列点文により、弧状に施文しており沈線はみられない。内側は波状に二重の刺突連点文を施し、その下に短線列文を施文している。胎土は黒褐色を呈する。

No.16、厚手の深鉢であり、波状口縁を成すものである。口唇部は断面が角をなす棒状の施文具を横に押捺したものであり、列点文というより短線列文とみた方が良いようである。表は、口唇部に沿って一列の刺突文を施し、その下部には横線文を奥に數重に描き、その上に斜行沈線を施し、やや不整形の格子文を呈している。内側には、横列に短線文を施し、その下部に短線列文を施文している。胎土は褐色を呈する。

No.17、厚手の深鉢であり、施文様はNo.16と同じである。

No.18、薄手の小型深鉢である。口縁部がかなり外反し脣部が膨らむものであり、口径が9.5cmと、当遺跡出土の土器でも最も小さい器形を成すものであるようである。表には、4重の刺突列点文、内側に2重刺突列点文を施し、刺突文のみで施文した土器である。胎土は赤褐色を呈する。

No.19、薄手の小型深鉢であり、口縁部が外反するものである。口唇部外側に押捺連点文を施し、表は横線文を3重にめぐらし、横線文間に列点文を施文している。内側には口縁部上部のみに横線文と斜行沈線を組み合せた格子状の文様を構成している。胎土は灰褐色を呈しており、少量の滑石を含んでいる。

No.20、薄手の深鉢であり、口縁部は直行し、肩部から脣部にいたってやや膨らみを呈するものであ

る。口唇部は、施文具の先端を押捺した間隔のせまい刺突文を施している。表は口唇部下に連点文を1重めぐらし、その下に2重の横線文を施文した繰り返し文となっている。内側も同じ文様構成であるが、内側では2重の横線文とかわって2重の短線列文となっている。胎土は赤褐色を呈する。

No.21、薄手の深鉢であり、口縁部がやや外反するものである。口唇部は、断面が円状を成す棒状の施文具により刺突した列点文を施している。表は、4重の短線列文を施し、その下、肩部から脚部にかけて、十字形の輪線を横並することにより方形の文様帶を構成し、その中にL字状の沈線を重複させていく。内側は、5～6重の短線列文を施文し、その下は無文化している。胎土は灰褐色を呈する。

No.22、薄手の深鉢であり口縁部がやや外反するものである。口唇部は、外側に押捺列点文を施し、表は浅い横線文を施文しているのみである。内側は、4重の刺突列点文のみを施文している。胎土は灰褐色を呈し、焼成は良好ではない。

No.23、薄手の小型深鉢であり、口縁部が外反するものである。口唇部は施文具を押捺した列点文を施している。表は、細いへラ状の施文具で軽く押し引いた感じで浅い短線列文を施文している。内側は2重の短線列文を施しその下に刺突列点文を施文している。胎土は灰褐色を呈する。

No.24、薄手の小型深鉢であり、口縁部がやや外反するものである。口唇部外側に押捺列点文を施文している。表は、先細りの施文具によって施文しており、細沈線の折帯文を構成している。内側は、表と同じような細沈線の横線文を不規則に施文している。胎土は灰褐色を呈する。

胸部文様（第8図）

胸部文様については、組帶文が大部分を占め、中でも折帶文が主流を成している。また、十字形もみられ、No.10のように逆上字形を重複させ方形文を構成するものもみられる。その他の文様としてはNo.3のように横線文と綫線並列文により文様構成を成し、横線文間に2列の列点文を施し、底部にかけては、斜行沈線の横並する特異な文様構成を成すもの、短線列文と列点文を交互に繰り返すもの（No.8、9、12）がみられる。

口縁部文様については、種々の文様構成がみられるが、胸部になると文様構成に単一化がみられる傾向にある。

底部文様（第9図）

底部文様については、ほとんどが摩滅しており判然としないが、綫列横線文が多いようである。曾畠式土器の特徴でもある蜘蛛巣状になる底部はみられなかった。特異なものとしてNo.6のように短直線文帶が直角に交わり網代形になるものが底部にみられる。

第3章 石器

神川内第Ⅰ遺跡出土の石器については、剝片石器がその大部分を占め、それに疊石器が出土している。剝片石器については、石材として黒曜石を多く使用しているが、石匙については、ほとんどがチャートを使用していた。疊石器については、石斧を除いて、河原石にみられる砂岩が多く使用されている。

石器の種類については、下記のとおりである。

剝片石器—石鏃、彫器、小型尖頭器、石匙、石錐、剝片石器、

石核、剝片。

疊石器—石錐、敲き石、石皿

1. 剝片石器

石 鏃 (第10図1~14)

基部の抉入があるもの、抉入がなく三角形を呈するものとに分けることができる。抉入のあるものでも抉入は浅い。三角形を呈するものについては、小型と大型に分けることができる。断面は、扁平で凸レンズ状をなす。すべて黒曜石。

彫 器 (第10図15~23)

縦長の剝片の先端部に刃部をもち、基部に打面をもっている。すべて表には、2次加工が加えられ、刃部の小剥離を行って彫刻刀面を作っている。裏面は、大きく剥離面を残している。特に、No.16、22のときは、切出し型ナイフを思わせる感がする。すべて黒曜石。

小型尖頭器 (第11図1~4)

細身のものと身広のものとに分けることができる。細身のものは、四角柱状剝片をサイドより、2次加工剥離を丹念に行い先細りにしたもので断面が菱形を呈する。身広のものは、三角柱状剝片の1辺を稜として、他の2辺を2次加工剥離を行い先細りにしたもので断面は三角形を呈する。No.1、No.4は黒曜石を使用しており、No.2、No.3はチャートを使用している。No.2についてはサイドを欠いており、No.3は身広のもので先端部を欠いている。

石 匙 (第11図5~11)

石匙が7点出土しているが、すべて縦形である。刃部剥離は表面の左サイドを行っているものが大半であり、No.6、No.8のみが右サイドに剥離面をもっている。つまみの抉入は浅く加工が不完全な感じをもつ。

No.5、縦形の石匙である。つまみの上部に打面をもち、表面とも剥離面を大きく残している。つまみの抉入は、きわめて粗雑であり、左サイドにチップによる刃部をついている。石質はチャート。

No.6、縦形の石匙である。つまみの上部にプラットホームをもち、表裏ともに剥離面を残す両形のものである。つまみの抉入は左サイドに2個所、右に1個所をもち、丹念な小剥離によって調整している。刃部は右サイドにつけている。石質はチャート。

No.7、縦形の石匙である。つまみの上部に自然面を残し、表には、2回の主要剥離をもち、裏は大きく剥離面を残している。つまみの抉入は浅い。刃部は、裏面の左サイドにつけている。石質はチャート。

No.8、縦形の石匙である。つまみの上部に自然面を残し、表には、2回の主要剥離をもち、裏は、大きく剥離面を残している。つまみの抉入は右サイドのみにもち、左サイドにはもたない。刃部は、表の右サイドにつけており、下部は欠損している。石質はチャート。

No.9、縦形の石匙で長方形を呈する。つまみの上部にプラットホームをもち、表は縦からの主要剥離をもち、下部に右からの小剥離を行っている。裏は縦からの剥離面を大きく残している。つまみの抉入は浅く、小さい。刃部は、表の下部につけており、エンドスクレイパーの感じをもつ。石質はチャート。

No.10、縦形の石匙であり、断面は三角形を呈し、先尖りである。つまみの上部に小さいプラットホームをもち、表は2回の主要剥離をもち、裏は大きく剥離面を残している。つまみの抉入は浅く、つまみが小さい。刃部は、表の左サイドにつけている。石質はチャート。

No.11、縦形の石匙であり、断面が凸レンズ状を呈する厚形のものである。表は、縦からの主要剥離面を残し、裏は2回の主要剥離を行い、一部に自然面を残している。つまみの抉入は浅く小さい。主要下部については、欠損しているが、刃部は左サイドにつけていたものと思える。また、この石器は主要部を欠いているため判然としないが、つまみの抉入をもつことから石匙の範に入るものと思えるが、一見、有舌尖頭器の基部を感じさせる。石質はチャート。

石 鋸（第11図12、13）

石鋸2点が出土している。上器片に補急孔のみられるものがあるため、当然、出土しても良い遺物であろう。

No.12、横剥ぎの剥片を利用したものであり、三角形を呈し、一見、石鉄を感じさせるものである。裏には、主要剥離を残し、打面を右サイド下部に残している。先端刃部は、表裏とも丹念な小剥離を行ない、長い刃部をつくっている。基部は、剥離面をそのまま残し、粗悪な感じがする。先端部の断面は三角形を呈する。石質は黒曜石。

No.13、縦剥ぎの剥片を利用したものである。表は、一面に剥離面を残し、一面に自然面を残している。裏は大きな剥離面を残している。先端部は、表のみから小剥離を行い短い刃部をつくっている。刃部の断面は三角形を呈している。石質は黒曜石。

剥片 石器（第11図14、15、第12図1～7）

縦長の剥片を利用し、1辺に刃部を設けたものである。基部にすべて打面を残している。剥片石器は形態からa形、b形c形に分類することができ、用途的にも異なっていたものと思える。

剥片石器 a 形 (第11図14、15、第12図1~3)

やや扁平で幅広の剥片を利用しており、基部に打面を残している。表は、2回の主要剥離を行っており、裏は、大きな剥離面を残している。刃部剥離は、表に行っているが粗雑な感がする。なかでもNo.15は丹念な刃部剥離を行っている。また、刃部は左サイドにもつもの (No.14、15、2) と右サイドにもつもの (No.1、3) とに分けられる。石質は黒曜石。

剥片石器 b 形 (第12図4、5、7)

縦長で、厚手の剥片を利用しており、基部に打面を残している。表は、1~2回の主要剥離を行っており、それぞれ1面の自然面を残している。なかでもNo.7は大きく残している。裏は、大きな剥離面を残しており、断面は台形状を呈する。刃部は、No.4、No.7については、右サイドにつけており、No.5は、端部につけている。石質は黒曜石。

剥片石器 c 形 (第12図6)

断面が三角形を呈する横剥ぎの剥片を利用し、基部を下にもっている。表は、左サイドに打面をもち、大きな剥離面を残している。裏には、殻をもち、1面に自然面を残し、1面には、大きな剥離面を残している。刃部は、左サイドに丹念なチップ状の剥離面を残している。石質はチャート。

石核 (第12図8~10)

石核は、小形のもののみが検出されており、大型のものについてはみることができなかった。No.8、No.10については、上面に自然面を残し、打面として利用したので縦に剥離面がみられる。しかし、剥離面には、統一性ではなく不規則な剥離を行っているようである。No.9については、自然縫の上部をカットして、平坦な面をつくり、この面を打面として剥片をとったものである。この石核についても剥離面に統一性を欠いている。石質は黒曜石。

2. 磨石器

石斧 (第13図1~3)

石斧は、3点出土しており、同一周辺から出土している。摩製の石斧で調刀 Axe と片刀の Adze に分けられる。

No.1、大形の摩製石斧で基部を欠いており、長さ、現長で8cm、幅6.1cm、厚さ1.8cmを計る。刃部は、両刃で鋭利な刃をもっている。表裏とも丹念に研磨が成されており、光沢をもっている。また、刃部は横摩りの摩製痕がみられ、身の部分には縦摩りの摩製痕がみられる。

断面は薄型の凸レンズ状を呈し、側面は、多角形を成している。石質は緑泥片岩。

No.2、細身の摩製石斧で、長さ12cm、幅4.7cm、厚さ2cmを計る。刃部は両刃で鋭利な刃をもっており、一部使用時の刃こぼれがみられる。表裏とも研磨がなされ、刃部、身とも縦摩りの研磨痕を残していく。

る。断面は、やや厚めの凸レンズ状を呈する。石質は粘板岩。

No.3、細身の摩製石斧で、長さ10.7cm、幅3.6cm、厚さ1.9cmを計る。刃部は片刃で鋭利な刃をもっており、一部使用時の刃こぼれがみられる。表は、刃部から身にかけて縦摩りの研磨痕がみられ、裏は基部に剝離打面を残しており、研磨が粗悪な感じをもつ。刃部は、横摩りの研磨によって、片刃を構成していることがうかがえる。断面は、半円形を呈する。石質は粘板岩。

石 銛（第13図4）

石斧は1点のみ出土している。扁平で大きな円礫の両端に簡単な剝離を加えて、抉り込みを作ったものである。最大長、10.4cm、最大幅9.2cm、最大厚3.4cmを計る。石質は砂岩。

敲き石（第13図5、第14図1～5）

敲き石は、最も多く30余点が出土している。No.1のように石棒的な敲き石を除いて、すべて、大小の円礫を使用しており、周辺に敲打痕を残している。No.1は、石棒状の敲き石であり、最大長25.8cm、最大幅7.7cm、最大厚5.5cmを計る。先端部に顕著な敲打痕をみることができる。

その他の敲き石については、最大径が10cm内外の大形のものと、最大径6cm内外の小形のものに分けることができ、その比は6：4の割合で小円礫使用のものが多いようである。石質は砂岩円礫。

石 盆（第14図6、7）

頗るな石皿は、2点が出土しており、他は破片である。

No.6、扁平な大形礫を利用してしたものであり、使用時に数片に割れたものと思われる。現長28cm、現幅13.5cm、厚さ5.5cmを計る。表裏とともに敲き石合として使用されたものと思われる。石質は砂岩。

No.7、大形礫を剝離して用いたものであり、使用時に数片に割れたものと思え、その残片がともに数点出土している。現長20cm、現幅17.5cm、厚さ5.7cmを計る。

表のみを敲き石合として使用しており、裏面は剝離面を大きく残している。石質は砂岩。

第4章 考 察

宮崎県における縄文時代遺跡の調査は、希薄であり、縄文時代研究途上にあるといつても過言ではなく、今後の研究成果に注目されるところであろう。

そうしたなかで、今回の祐川内第Ⅰ遺跡の調査は、縄文時代前期に比定される曾畠式土器の研究に1指標を与えるものと確信する。また、宮崎県における曾畠式土器の出土遺跡をひろってみると、昭和31、32年と2回にわたって、日高正晴氏によって調査された、西都市妻の原口遺跡、昭和41年に鈴木重治氏によって調査された小林市大字東方字本田の本田遺跡、昭和47年に九州縦貫自動車道建設事業によって、宮崎県教育委員会が実施した小林市大字南西方字平木場の平木場遺跡、同じく、えびの市大字西長江浦字西城の灰塚遺跡が主なものであろう。こうした出土遺物を概観すると、西都市の原口遺跡を除いては、すべて、九州山地の霧島山系東麓地域に立地していることがうかがえる。

また、県中部、県北部については、遺跡分布は希薄であり、表探例が数個所知られているむきもあるが詳らかではない。

以上のことから、県下における曾畠式土器の伝播は九州山地横断ルートと鹿児島県から、川内川流域に沿って北上したルートが考えられる。どちらにしても小林盆地周辺がその主たる遺跡の立地したところであろう。

遺物について、土器でも形態的に深鉢が大多数を占め、それに浅鉢が少量含まれていた。深鉢では、口縁部の直行するものと外反するものとに分けられ、厚手の土器については、口縁部が直行するものが多く、なかには波状口縁を成すもののがみられる。また、薄手の土器については、口縁部が外反し、胴部にいたってやや膨らみをもつものが多い。

浅鉢については、口縁部の外反が大きく、頸部がしまり、肩部が張って円底へと移行している。底部にいたっては、大部分が円底を呈している。土器成形については、まず円底をつくり、それに輪積みによって胴部の立ちあがりをつくり、胴部、頸部、口縁部と成形していったものと思われる。文様については、口縁部では短線列文と列点文との構成文が最も多くみられ、胴部では、組帶文と卜字形文がみられた。

(注3)

曾畠式土器については、3形式に分類している。Ⅰ類は、佐賀県の西唐津海底遺跡の土器、Ⅱ類は、熊本県の宇土市曾畠貝塚の土器、Ⅲ類は、鹿児島県大口市山野日勝山の上器。

Ⅰ類は、文様構成に整然とした規律がある。Ⅱ類は、口縁部が外反したり、文様構成にみだれを生じる。(注4) Ⅲ類は、胴部に膨らみを生じ、あるいは、口縁部が低い波状口縁を呈するとしている。以上の編年からすると祐川内第Ⅰ遺跡の曾畠式土器については、口縁部が波状口縁を成すもの、胴部の膨らみをもつものの、文様構成にみだれを生じ規律性がなくなることから上記の編年からするとⅢ類に編年することができ、曾畠式土器としては終末の時期に当る感をもつ。

石器についてみると、剝片石器が主体を占めているが、祐川内第Ⅰ遺跡で代表的な石器は、摩製石斧であろう。摩製石斧は3点出土しており、扁平で身広のものと厚手で細身のものとがある。身広のものは縞泥片岩を素材としており、摩製が丹念であり、摩製度を良く観察することができる。細身の2点については粘板岩を素材としており、刃部の幅部摩製が著しい。

これらには、両刃と片刃があり、片刃のものは、チョウナ的性格を強くもつものである。剥片石器は、黒曜石を素材としたものが最も多く、なかでは石匙のように、すべてチャートを素材にしたものもある。また、これらについては、縦剥ぎの剥片を利用したものが多く、特に石匙については、それが多くみられ、すべて縦剥ぎの剥片を利用したものであり、横剥ぎの剥片を利用したものはない。

剥片石器の多くは、裏面に大きく剝離面を残すものが多く、刃部の調整についても、粗悪な感がするものが多い。

以上、柿川内第Ⅰ遺跡については、包含層は、一層に限られ、単純遺跡の性格を強くもつものであり、縄文時代前期の遺跡（特に曾畠式土器出土遺跡）を調査し得たことは、宮崎県における縄文時代研究の1ページとなり、今後の研究の1資料ともなりうるであろう。

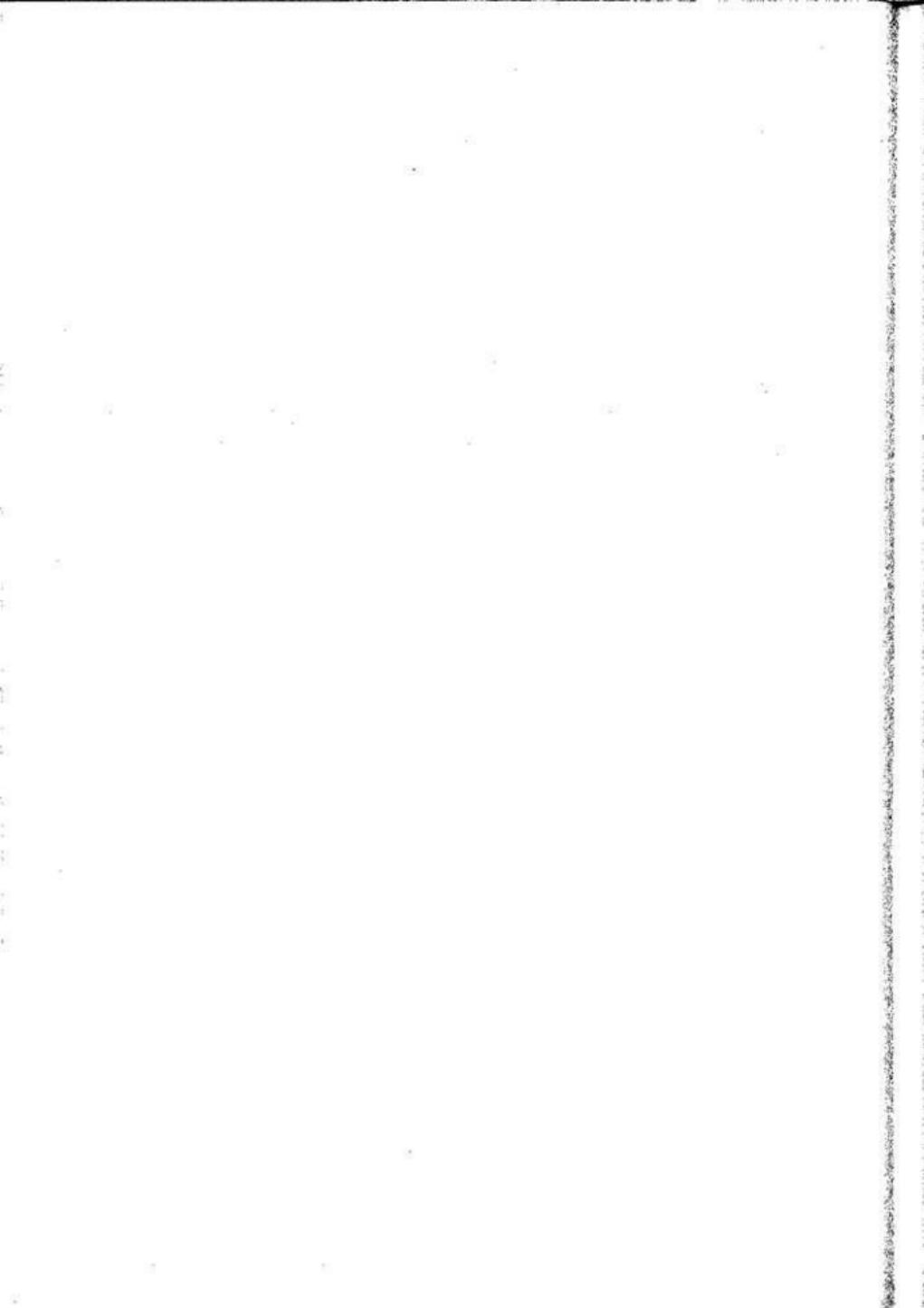
また、本報告書は調査終了から報告書作成までの期間が短期間であり、十分な検討を加えることができなかった。したがって、不十分な点が多くあろうかと思えるが、この点については、今後の研究課題であることを記しておきたい。

注1 宮崎県教育委員会（1974）「大荻遺跡(1)」
＊ （1975）「大荻遺跡(2)」

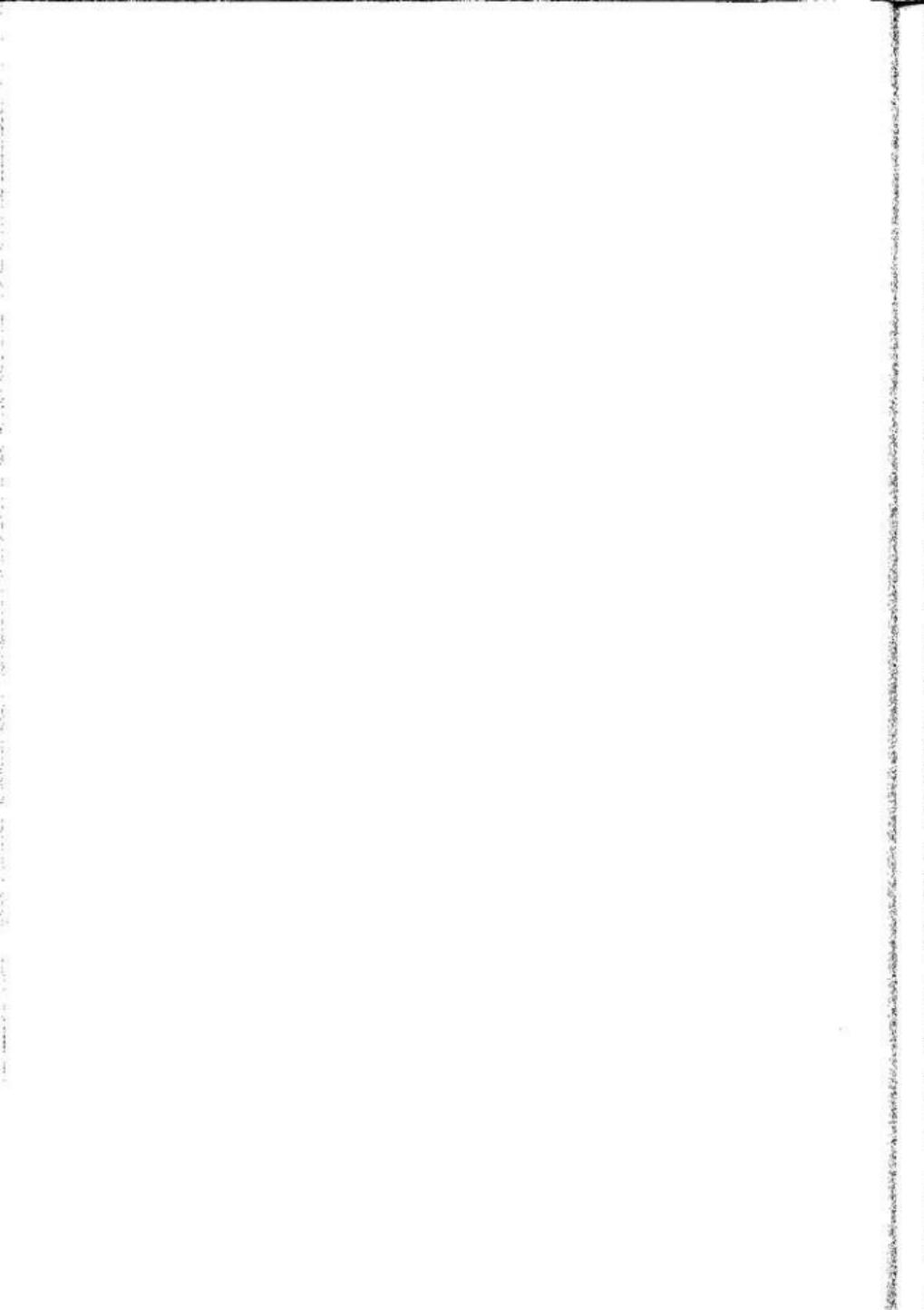
注2 坂田邦洋（1973）曾畠式土器に関する研究「江瀬貝塚」『曾畠式土器文様』を参考とした。

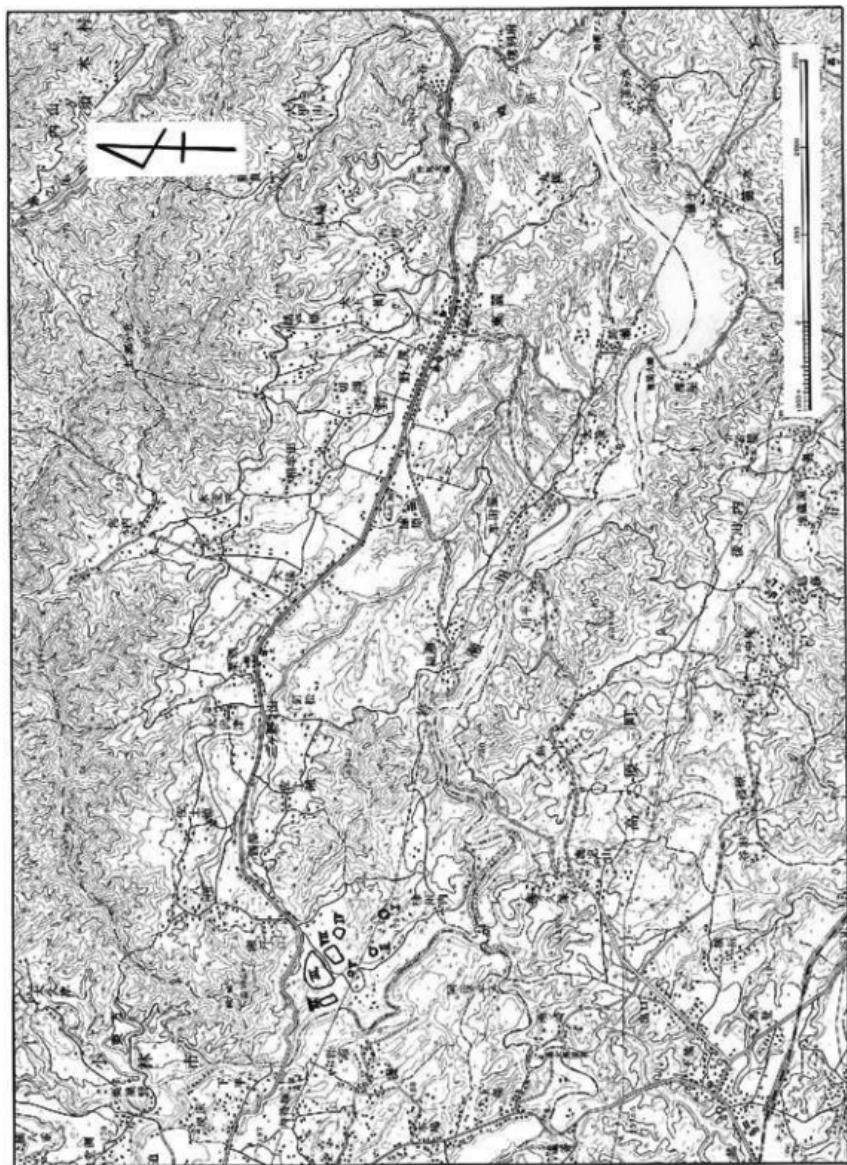
注3 杉村彰一（1962）「曾畠式土器に関する一考察」熊本史学23

注4 乙益更勝（1965）「縄文文化の発展と地域性」九州西北部日本の考古学 II 250—267



柿川内第Ⅰ遺跡
図及び図版

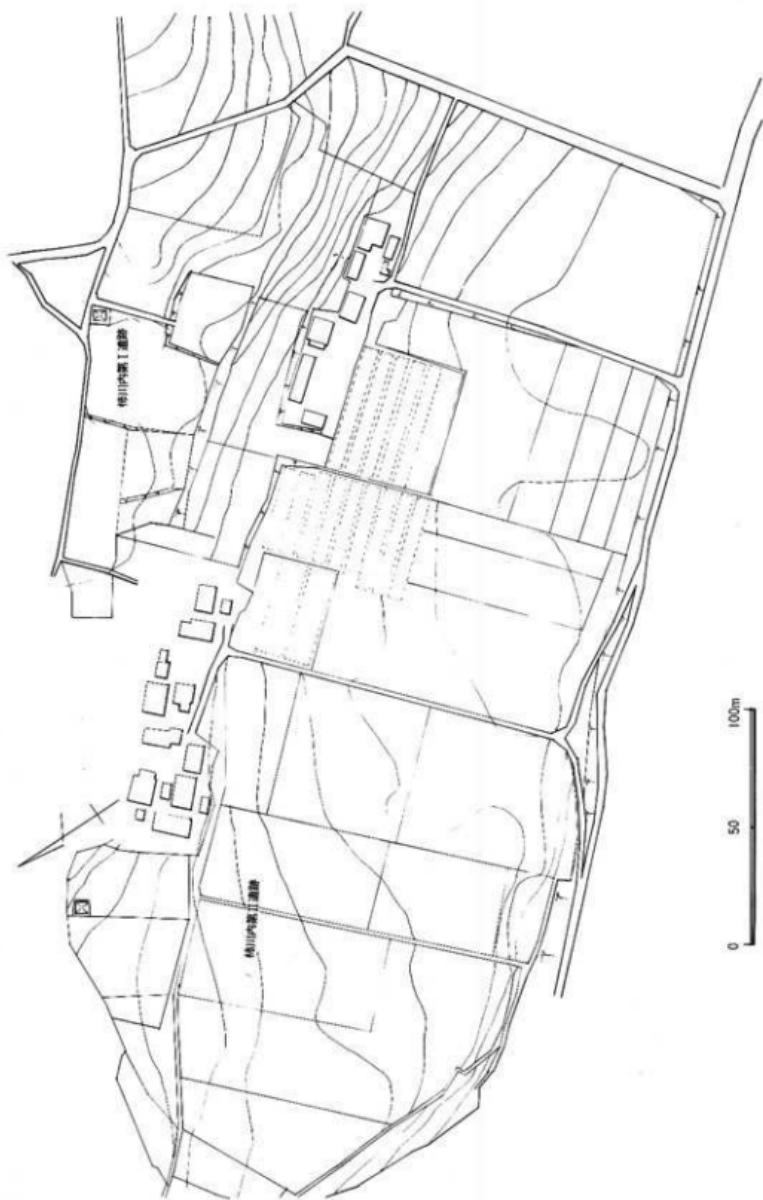


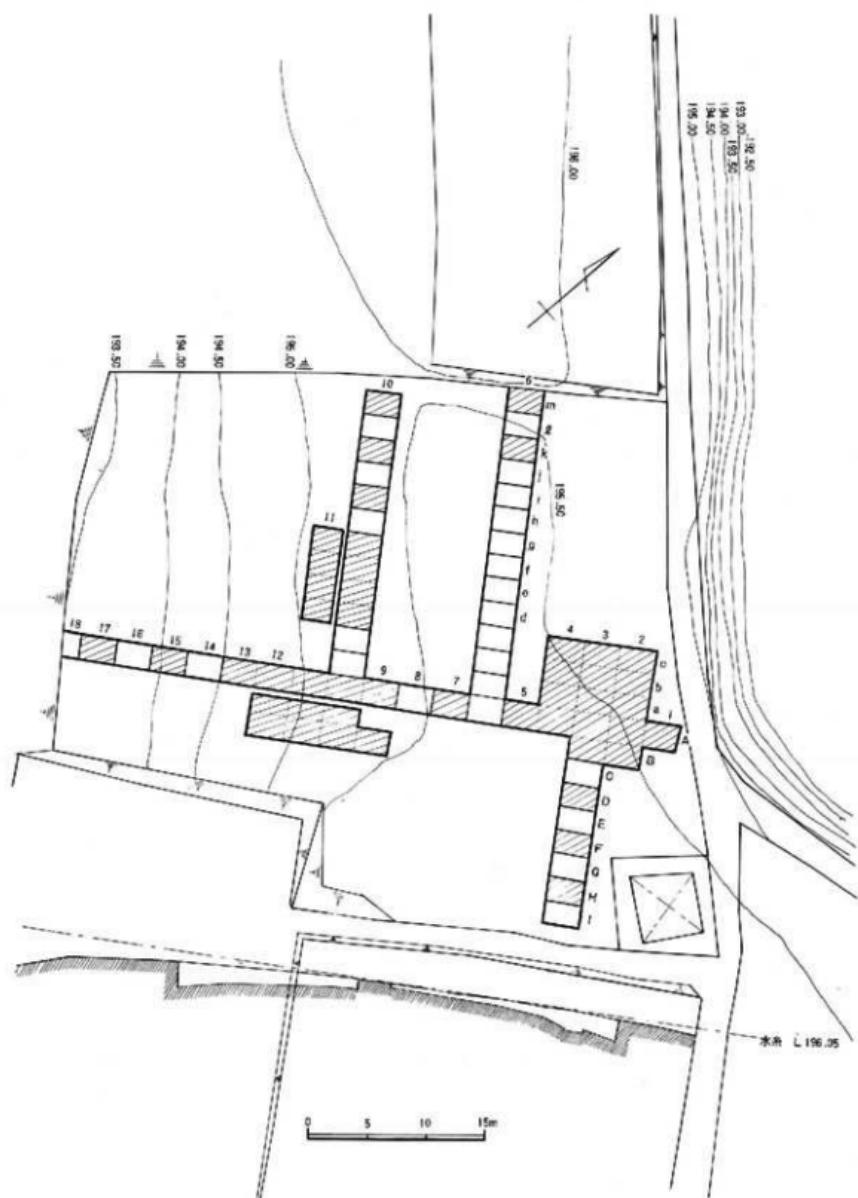


第1図 柿川内遺跡周辺地形図(1)

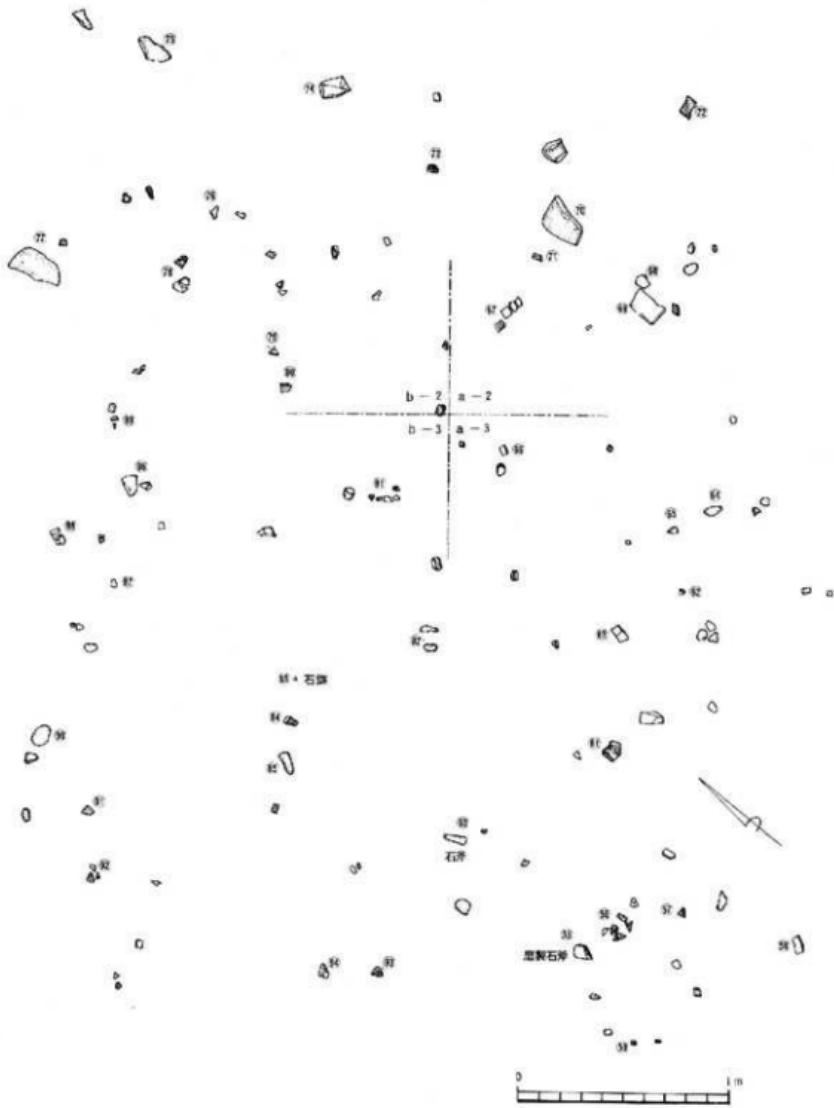
I	柿川内第1遺跡	III	地下式横穴群	V	弥生住居址
II	。 2。	IV		VI	
		VII		VIII	弥生土塁墓群 (既調査)

第2図 柿川内遺跡地形図 (2)





第3図 柿川内第Ⅰ遺跡発掘区図

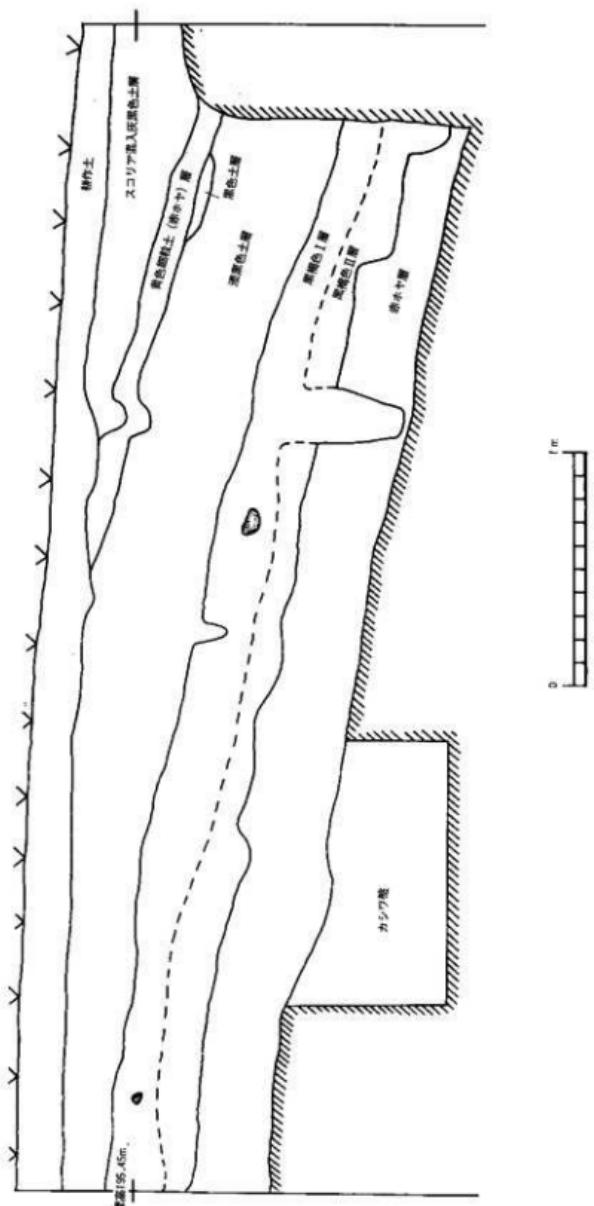


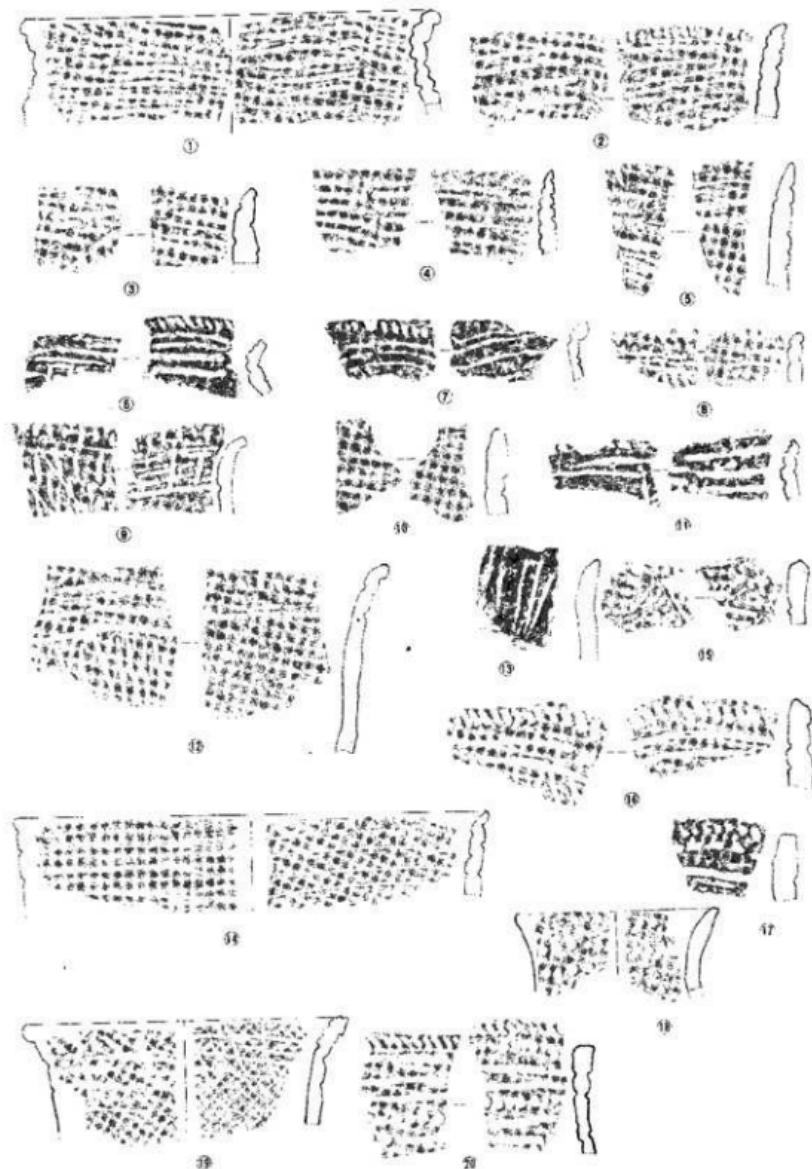
第4図 a-2、a-3、b-2、b-3区出土状況



第5図 A-2、A-3、B-2、B-3区出土状況

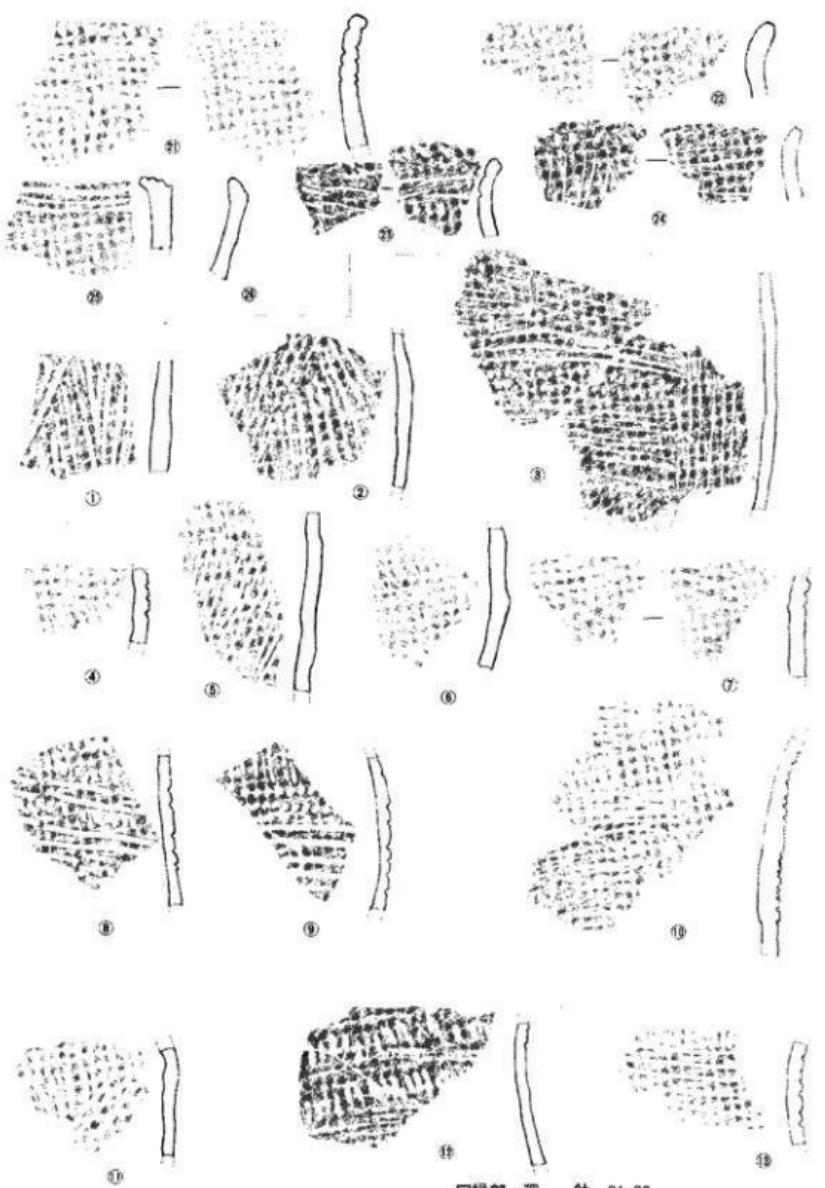
第6図 A-1、A-2区、西壁土層断面図





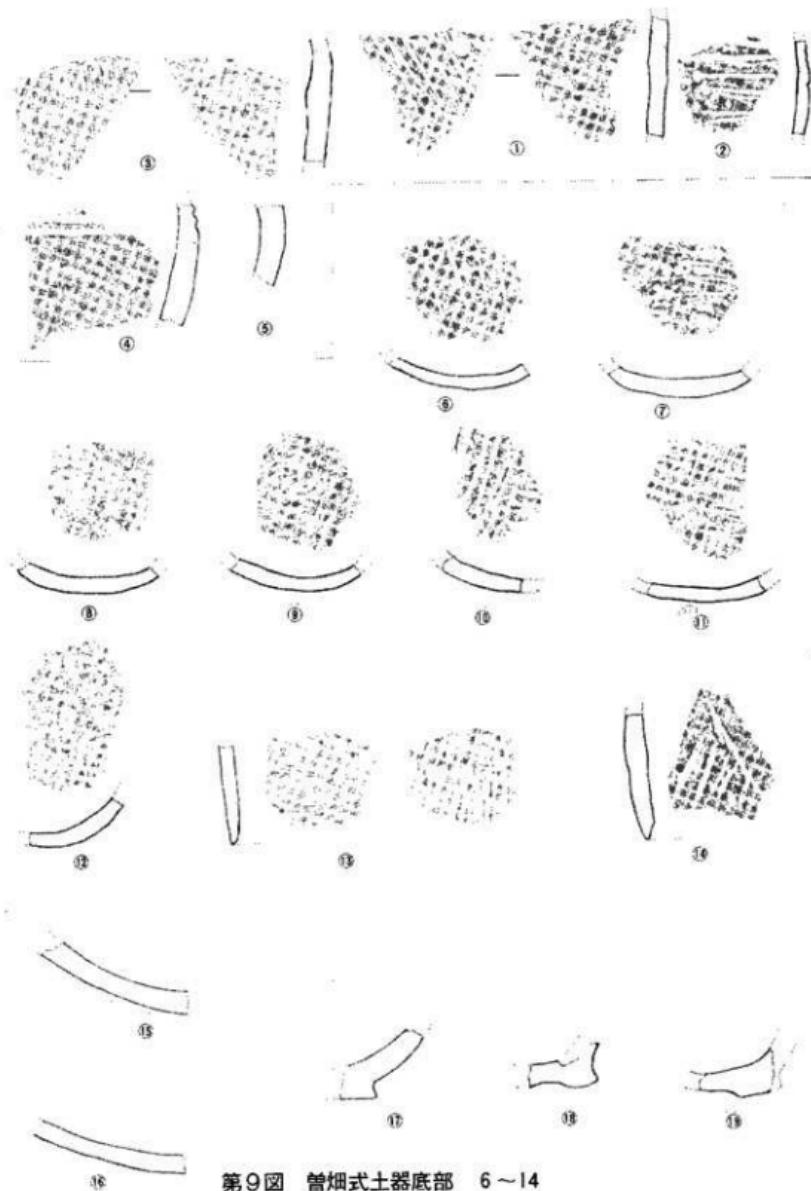
第7図 曽畠式土器、口縁部拓影

深 鉢	2. 4. 5. 9. 10. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 20
小型深鉢	3. 7. 8. 18
浅 鉢	1. 6. 11

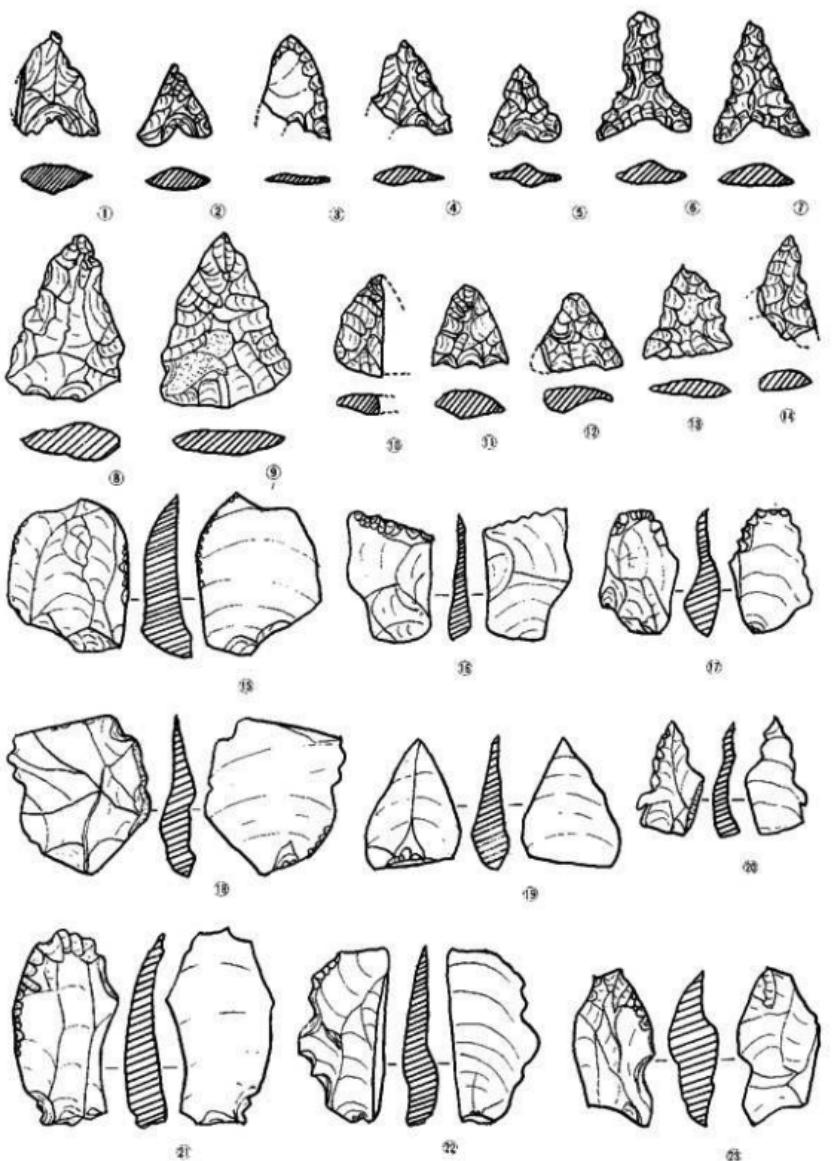


第8図 曽煙式土器、口縁部及び胴部拓影

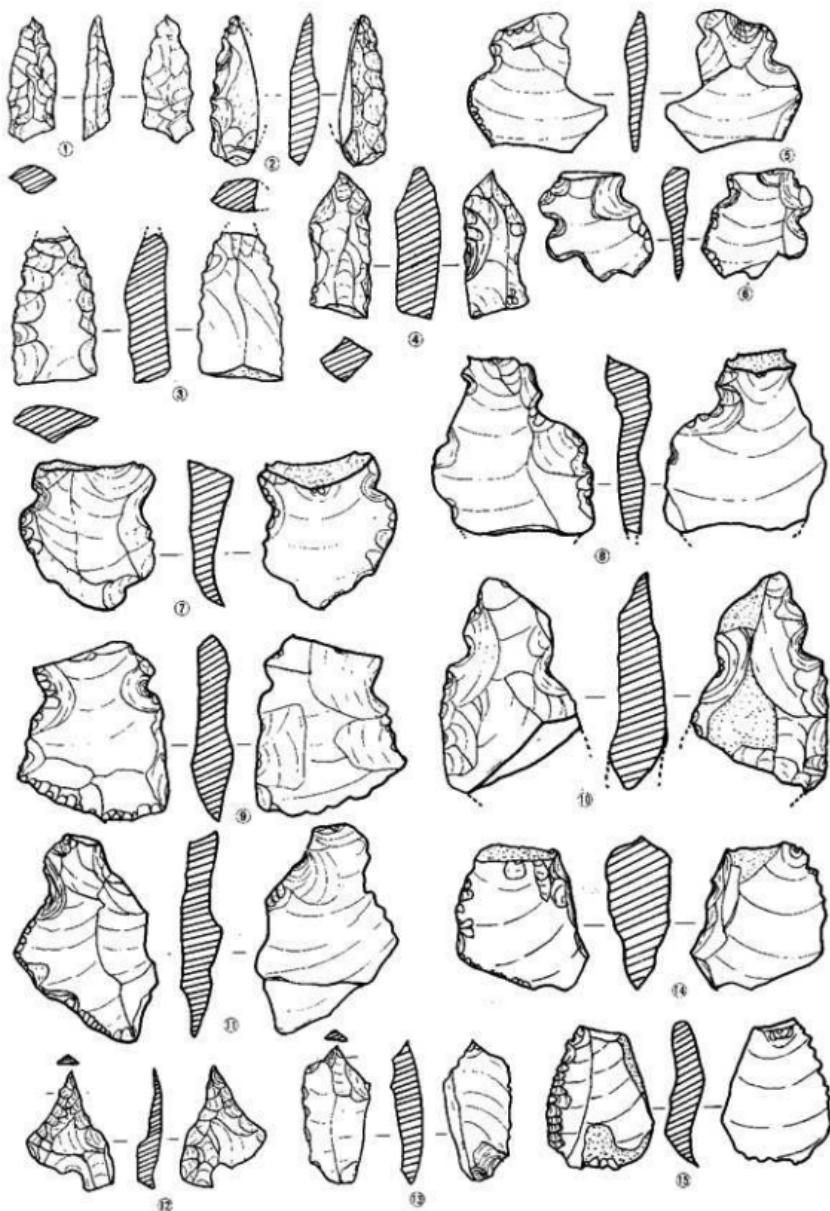
口縁部 深 鈎	21.22
小型深鉢	23.24
胴 部 深 鈎	2. 3. 5. 7. 8~10.12
小型深鉢	1. 4. 13
浅 鈎	6. 11



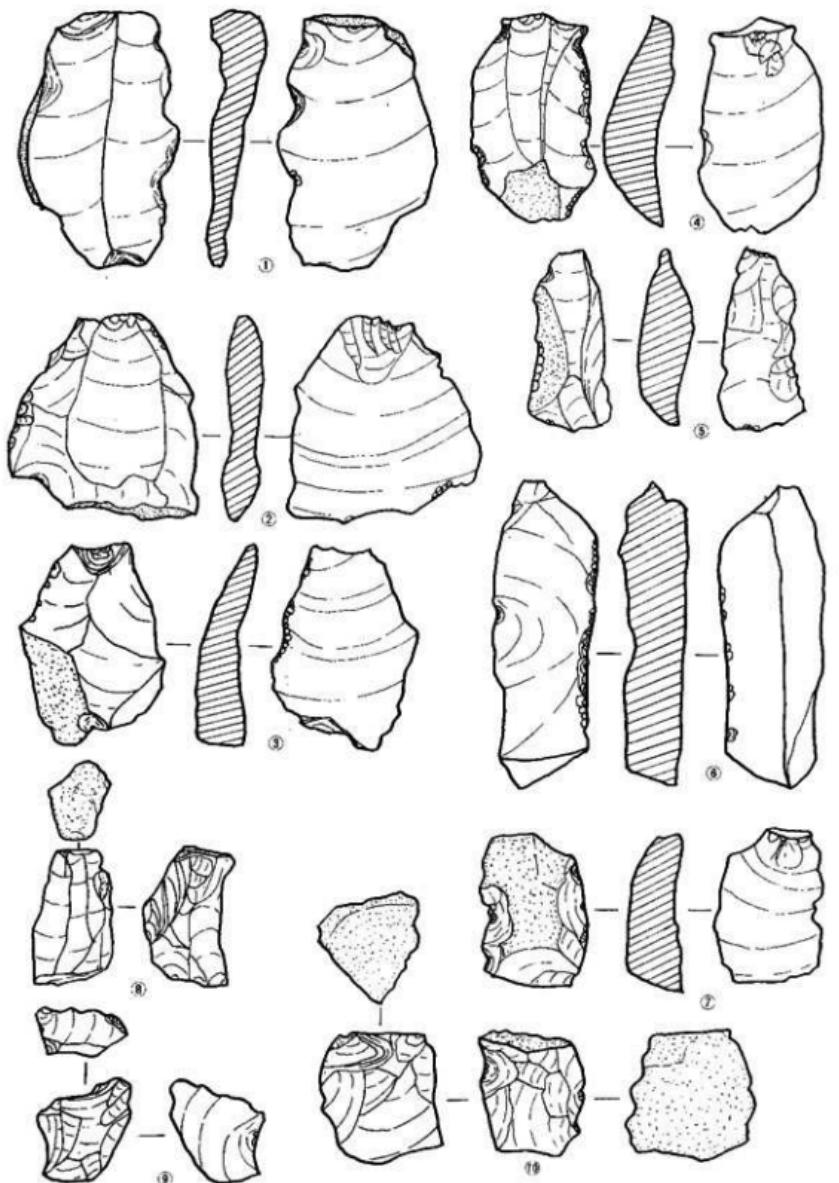
第9図 曾畠式土器底部 6~14
有補修孔土器片 1, 2
その他の土器胴部及び底部 3~5, 15~19



第10図 刮削器 石彫器 1~14
彫器 15~23



第11図 剥片石器 小型尖頭器 1~4 石錐 12~13
石匙 5~11 剥片石器a形 14~15



第12図 剥片石器
 剥片石器 a 形 1~3
 ▲ b 形 4. 5. 7
 ◆ c 形 6
 石 棍 8~10

第13図 磚石器

石斧

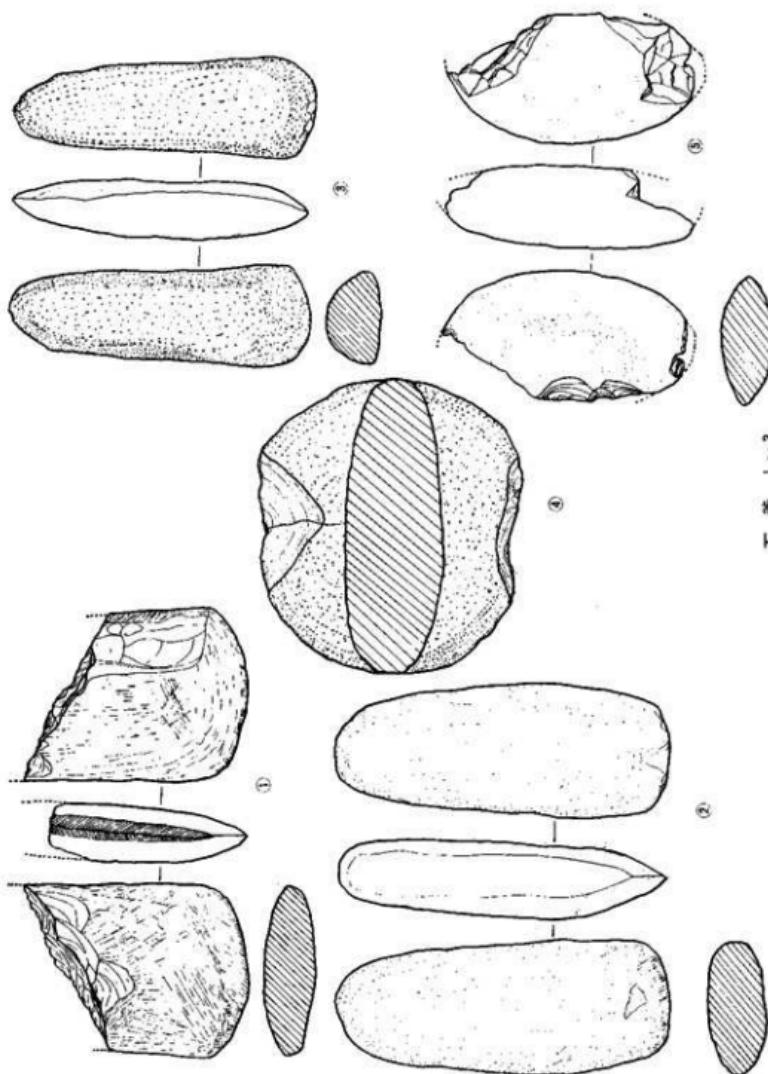
1~3

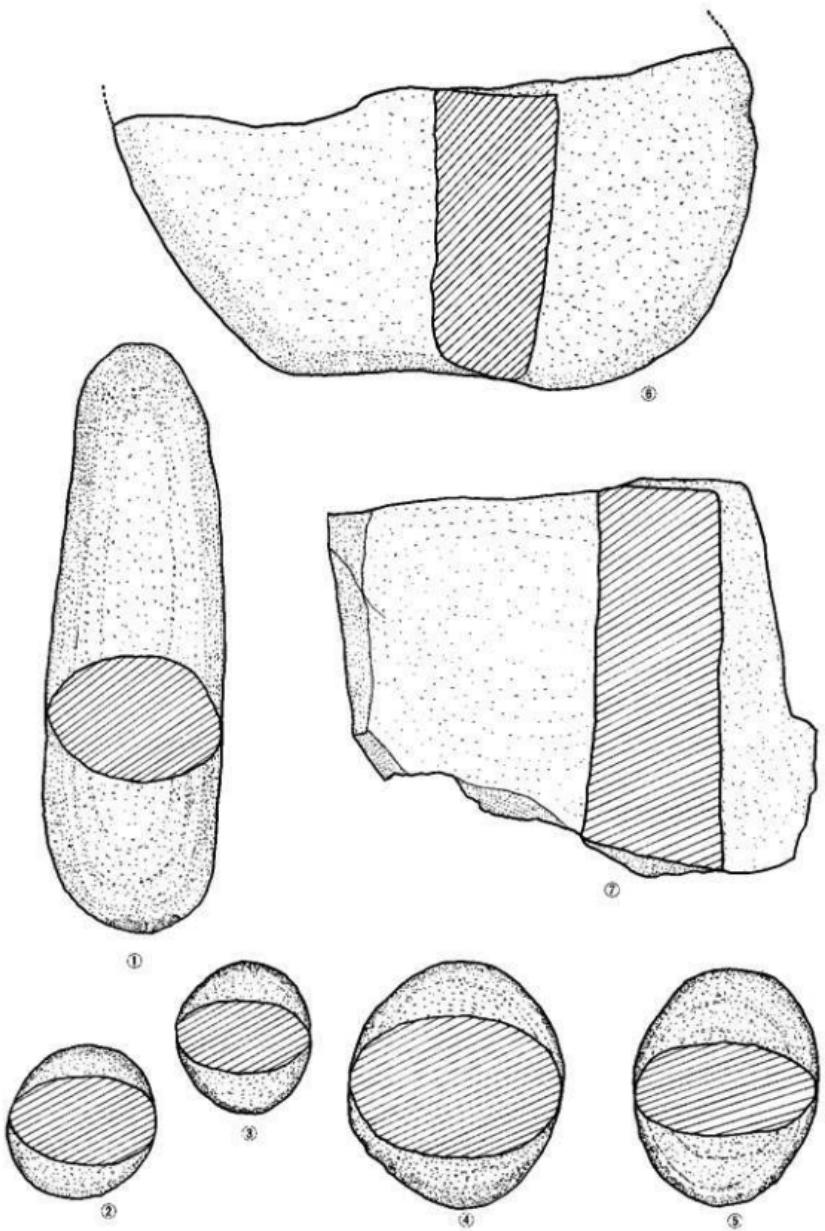
石錐

4

敲き石

5





第14図 磲石器 敲き石 1~5
石皿 6, 7



図版1 柿川内第Ⅰ遺跡近景(1)



図版2 柿川内第Ⅰ遺跡近景(2)



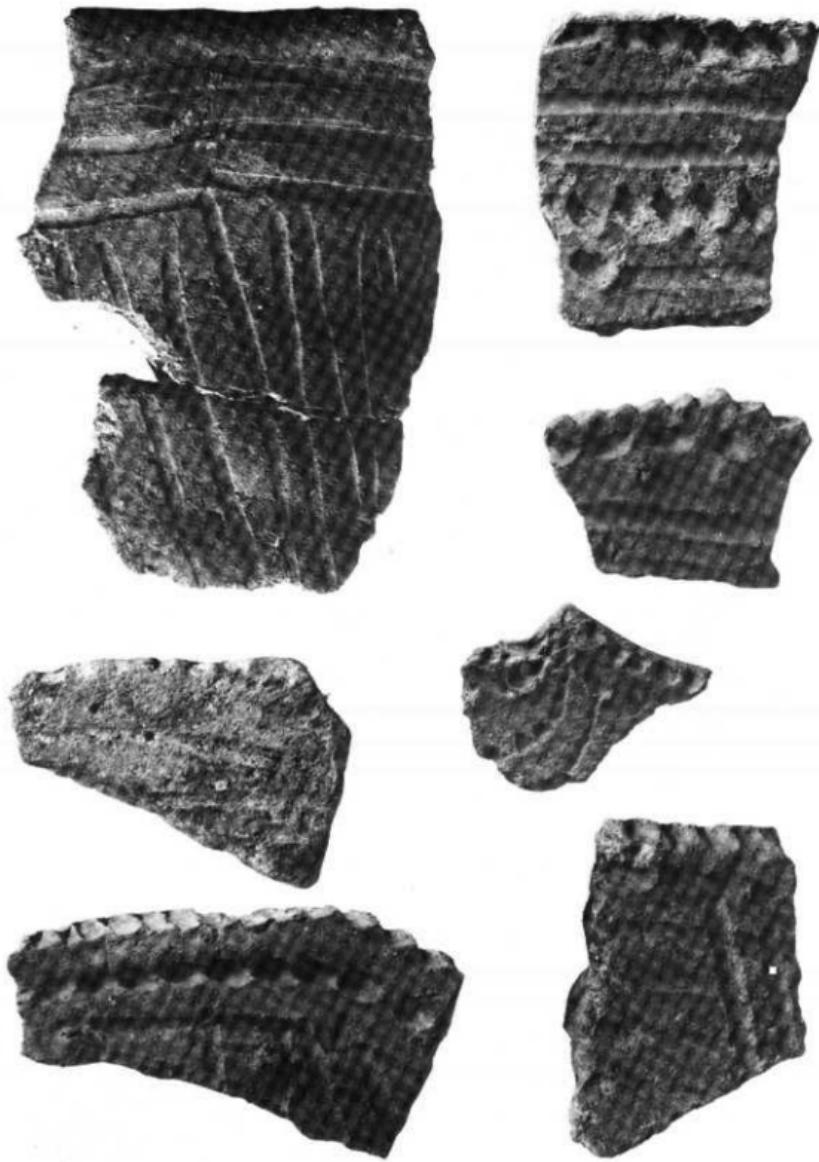
図版3 A-1、A-2区西壁土層



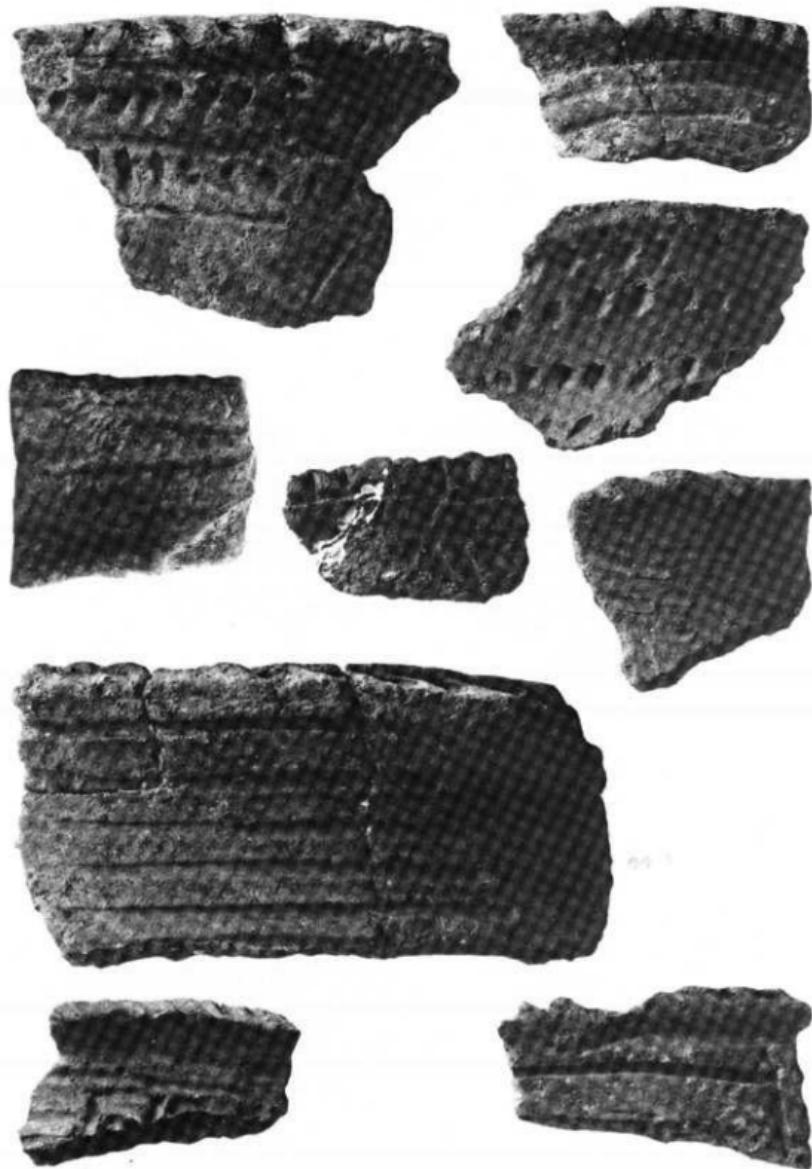
図版4 B-3区出土状況



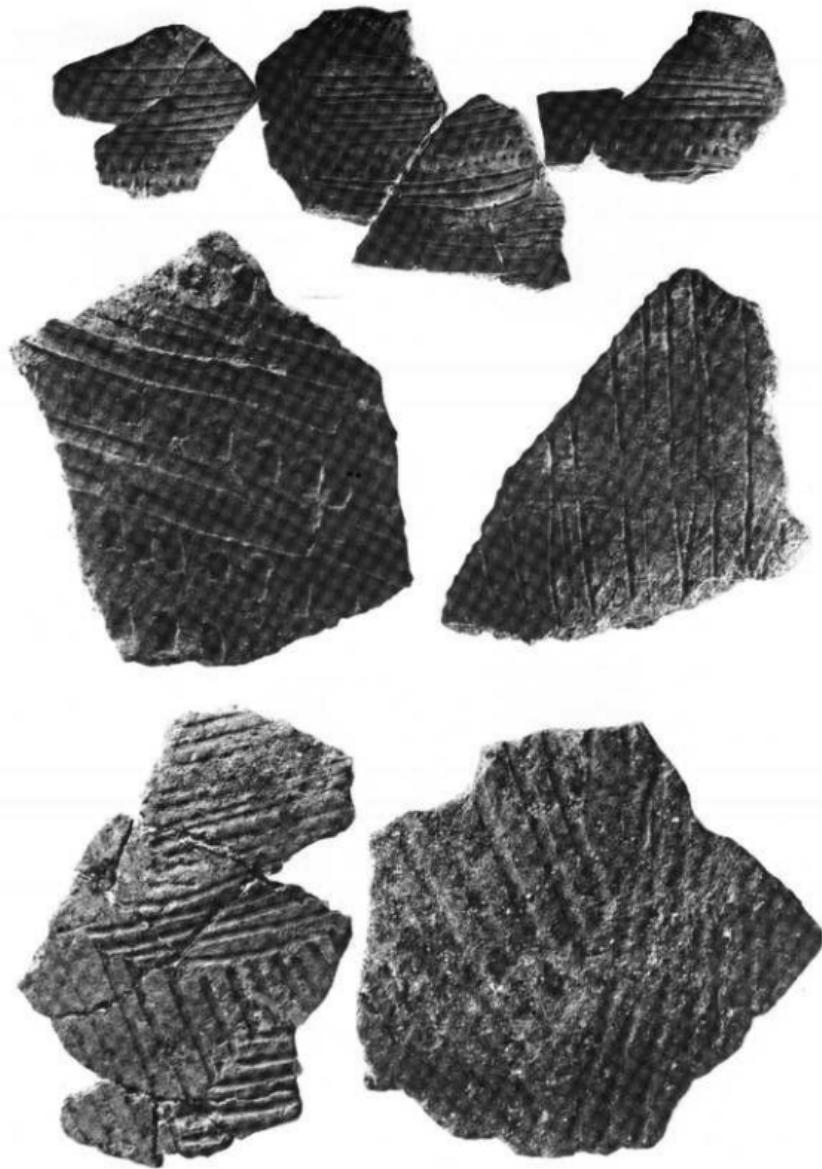
図版5 出土の土器（深鉢Ⅰ類）



図版6 出土の土器（深鉢 2類）



図版7 出土の土器（小型深鉢、浅鉢）



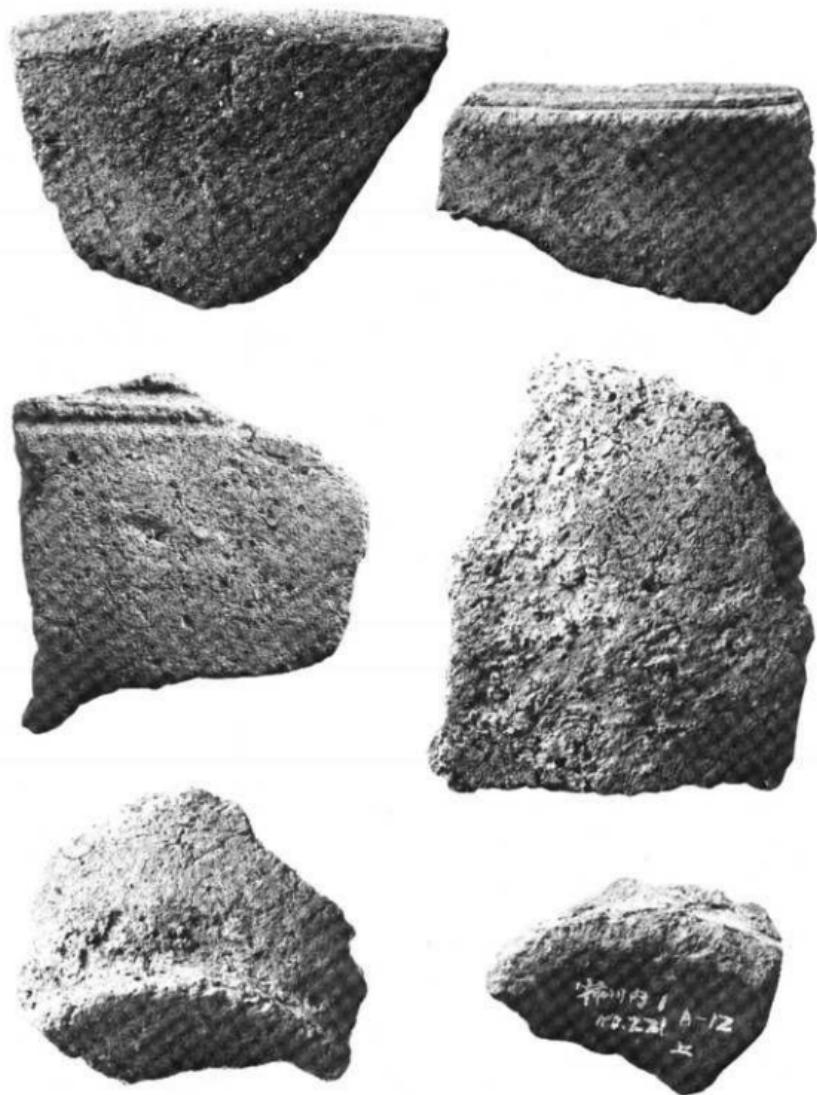
図版8 出土の土器（胴部）



図版9 出土の土器（深鉢胴部、浅鉢胴部、有補修孔土器片）



図版10 出土の土器（土器底部、底部接続面土器）



図版11 その他出土の土器



図版12 剥片石器（石鏹、彫器、小型尖頭器、石錐）



図版13 剥片石器（石匙、剥片石器a形・b形・c形、石核）



図版14 磚石器（石斧、石錘、石皿、敲き石）

柿川内第Ⅱ遺跡

本文目次

第1章 遺跡	(41)
1. 遺跡付近の環境	(41)
2. 調査の経過	(41)
3. 各トレンチの状況	(42)
(1) 第1トレンチ	(42)
(2) 第2トレンチ	(42)
(3) 第3トレンチ	(43)
(4) 第4トレンチ	(43)
(5) 第5トレンチ	(43)
第2章 出土した遺物	(44)
1. 石器	(44)
2. 土器	(44)
(1) 縄文式土器	(44)
(2) 弥生式土器	(45)
(3) 上師器	(45)
(4) 須恵器	(46)
第3章 結言	(47)

挿 図 目 次

第 1 図	第1トレンチ北寄・東面土層図	(49)
第 2 図	柿川内第Ⅰ遺跡地形図	(49)
第 3 図	第1トレンチ北寄・土器分布状況実測図	(50)
第 4 図	第2トレンチ15、16区上器分布状況実測図	(51)
第 5 図	第4トレンチ6区南部～7区土器分布状況実測図	(52)
第 6 図	剝片石器実測図	(53)
第 7 図	錐形土器実測図	(53)
第 8 図	錐形土器の糸切底拓影	(53)
紙 9 図	縄文式土器の文様拓影	(54)
第 10 図	弥生式土器の文様拓影	(55)

図 版 目 次

図 版 1	第1トレンチ出土状況	(56)
図 版 2	出土遺物	(57)
図 版 3	第4トレンチ及び第2トレンチの状況	(58)

第1章 遺跡

1. 遺跡付近の環境

第1遺跡は第1遺跡の西南に20mぐらい低い広い台地で、岩瀬川の北岸に当り、広さは東西約200m、南北約150mの広い畑で北部に数戸の入植農家があった。北側は第1遺跡に続く渓谷で、そこに九電の高圧線の送電塔が立っており、南側は1段低い台地があってその南側を岩瀬川が流れており、西側も渓流があり、東方は畑地が続いていた。

2. 調査の経過

昭和51年11月15日の午後台地の北隅に近い民家の南方に、近くにあった東北から西南にこの台地を横断している農道に平行して長さ32m、幅3mの第2トレンチと、その両側に幅3mずつでこれに平行する第1（西側）、第3（東側）のトレンチを設定した。これはその近くに試掘溝があり、その溝の黒色土層中から縫文土器の口縁部が発見されたので、遺跡があればこのトレンチによって掘えられると考えたからであった。そしてこの3トレンチは各3m平方ずつに分け、1トレのA、B、C区というように呼ぶこととした。そして翌16日から基点である第2トレの△区とC区から発掘に取り掛った。

ここでこの第1トレンチ北寄りの東側断面によってこの台地の地層について説明すれば、地表から30cm内外にボラを混じた耕作土があり、その下に黄色のボラ層が10cm～15cm入っており、その下にボラを混えた黒土層が8cm～10cm入っており、さらにその下に苦土という黒色の土層が20cm～25cm入っており、その下に堅い粘質の黒色土層がある。そして石器や土器が包含されているのは苦土と堅い粘質の黒土層の中であったから、その下は発掘しなかった。（第1図参照）この第1図でも見られるように、この台地は広い畑になっているが、この地層が北から南にほとんど平行していることは、この平地が人工的に山を削って平らにしたものではなく、自然にこの様に形成されたものであることを示している。

発掘を進めるとA区の西北隅で突然壺器と思われる赤褐色の縫形土器が伏せた形で完全なままで発見されたが、上の土を除くと上になっている底面に糸切痕が見られた。その存在する地層上の位置は表土下35cmで、下のボラ層に底を上にしてあった。〔図版1(1)参照〕それでこの土器の関係を調べるためにA区を北に3m延長し、さらにこの拡張区とA区の1部（西側）を1m西に拡張したところが、そこに柱穴5個が南北の方向に1列に並んでいるのが発見された。これらの柱穴は直徑15cmまたは10cm内外の円形または方形のもので、ボラ層の下から掘り込まれていた。

翌17日は雨天であったが、現在のように人夫の手で掘ったのでは能率が上らないので表土はブルトーザーで排除してもらうこととし、今日はブルトーザーが現地に来るということであったから、雨の中を野間、矢野剛両主事と現場に行ったところが、ブルトーザーが来ていたので新たに四本のトレンチを設定することにして、その場所を定めてブルに表土約50cmを排除させた。その新設のトレンチは今まで掘っていたもの（1トレ2ヶ所）の南方に1直線に長さ84m、幅2mのものを第2トレンチとなし、さらに西北方高圧線の送電塔のある畑の西側の畑に断崖の縁に沿うて、長さ48m、幅2mのものを設け、これを第3トレンチとなし、台地の西側に近い所に、これを崖に平行に長さ51m、幅2mのものを設けて第4トレンチ

となし、さらに第2トレンチの東方に、これと併行して長さ84m、幅2mのものを設けてこれを第5トレンチとなした。(第2図参照)

翌18日から24日までこれらのトレンチを発掘したが、土器片は多く散布していたが住居址などを発見することはできなかった。

3. 各トレンチの状況

(1) 第1トレンチ

これは前に記したように、錐形土器と柱穴が発見されたA区とC区であるが、A区を拡張したのでA区は第2図で見るようすに凸字形をなすことになった。これは5個の柱穴の続きを探した結果であるが、柱穴は5個以外には発見されなかった。尤もトレンチの北方には家の庭があり、西北部には甘藷が貯蔵穴に埋められてあって、掘り下げることができなかったが、柱穴の間隔は最南のものとその北の穴とが1.4m、南から2番目の穴と3番目の穴の間隔が1.3m、3番目の穴と4番目の穴との間隔が90cm、4番目の穴と最北の穴との距離が70cmであるから、この距離から考えてその前後左右にこれと関連する柱穴ははずないであろうと考えられる。それならばこの柱穴は勿論柱が建っていたのであるが、その構築物は何かという問題が残る。

これらの柱穴は最南のものが梢円形で20cm×15cm、深さ25cmで、その北のものが同じく梢円形で15cm×13cm、深さ26cm、その北方のものは方形で13×13cm、深さ23cm、その北方のも方形で13×13cm、深さ23cmとほぼ同形である。また最北部のものは円形で直径13cm、深さ13cmであった。そして前にも触れたように、これらの柱穴はボラ層の下から掘り込まれていた。そして柱穴の中にはボラが詰まっているのではなく、火山灰のような白い砂が入っていた。これらの状況から見て、この柱穴に構築されていた建築物は、霧島山の噴火によってボラ層が形成される直前に設けられたであろうと考えられる。従ってこの1列の穴に柱を建てて、その柱に横柱を渡して大根を干したり、またはハウスの柱を立てたりしたものではないことは明らかである。しかしそれでないとすれば、1直線の構築物としては風避けか、又は戦時の1時防寒か以外には考えられない。またこの両トレンチからは底部の黒色土層から縄文・弥生式の多くの土器片や石片が発見された。(第3図および図版1(2)参照) またC区にも土器の破片が散布していた。

(2) 第2トレンチ

第2トレンチは第1トレンチの延長線上に設けたトレンチで長さ84m、幅2mで、これを長さ3mずつに区切って28区を設定し、1区または2区を飛ばして発掘し、遺物の多い所は飛ばさずに拡張した。各区に大小の土器があったが、第15区と16区に弥生式土器が集中的に多い所を発見し、中には高壙破片も混っていたので、住居址があるのではないかと思って充分注意して発掘したが、竪穴式住居址は発見されなかった。(第4図参照) それでこれ程上器があって竪穴がないのは、竪穴住居ではなく高床式住居かも知れないから柱穴の発見に重点を置きたいと思った。なおこの15、16区の土器片はほとんど弥生式であった。

(3) 第3トレント

第3トレントは高圧線の送電鉄塔の西側の畠に設定した長さ48m、幅2mのトレントで、これを3m刻みに16区を設定し、1区置きに発掘した。ここではブルドーザーでトレントを設定したときトレントの北側と南側に黄色の土が上に出ている所が2ヶ所だったので、これはテッカリ地下式古墳の豊穴部であろうと考え、男の人夫4人を連んで掘らせたところが、両方とも殆んど同じ凸字形の穴で突起部を西に向けており、何かの機械をそこに据えるようにできており、中から銅線やネジなどが出てきたので、近代的建築物があったものと思われる。（村人の話では送電塔が台風で倒れたことがある由であった。）このトレントでも繩文・弥生の破片が発見された。

(4) 第4トレント

このトレントは台地の西側に周辺近くに設定されたもので2m×4mの区を17区設定して1区置きに発掘したが、第6区、7区に土器片が集中的に散布しているのを発見したので、ここに住居址があるのではないかと思い慎重に調査したが、ほぼ中央に2個の柱穴を発見したが、住にはなかった。〔図版5、図版3(1)〕

(5) 第5トレント

これは最も東側に設定した長さ84m、幅2mのトレントであったが、これを4m刻みに21区として1区置きに発掘したが、土器片が多少散布しているだけで何ら遺構らしいものはなかった。

(付) 第2トレントの地下式古墳址

第2トレントに穴があると人夫が呑うので行ってみると、床面の落ち込んだところがあり、地下式古墳の豊穴式前室の底であろうと思われたので通道を探したところ西側に入っており、〔図版3(2)〕その通道の左側入口に土師器の高杯破片2個〔図版2(2)の下段2個〕が発見された。しかし玄室は既に破壊されていて確認することができなかった。しかしこの高杯破片のあった所は黒色土層の下の粘土質の硬いローム層の中であったから小形の地下式古墳があったものと考えられる。参考のために付言して置く。

第2章 出土した遺物

1. 石 器

出土した遺物は石器と土器であったが、石器は確実に石器と呼ばれるほどのものはなかったが、そのうち2、3のものを挙げれば第2トレンチ10区で発見された平石がある。両面が滑かになった梢円形の石皿のように平たい石を縦に1直線を引いて打削ったような形で、長さ25cm、幅11.5cm、厚さ5.5cm、何かに使用したように表面が滑らかであるが1端に剥ぎ取った跡がある。〔図版2(3)参照〕石質は硬く、灰緑色で割れ目を見ると石英らしいキラキラ光る小さいものが見える。輝緑岩ではないかと思われる。面白いのは割れ目の直線部が淡紅色を呈していることで、削る時に1直線に火を焚いて、その部分を1整して2つに削ったのではないかと思われる。これは削って何かに使用したのであろう。ここに各トレンチから、この石の1部を剥ぎ取ったと思われる1方が刃になり、他方に自然面を残した剝片の石が数個出ているのは、石庖丁（施術具の意味でない）に使用されたのではなかろうかと思われる。その意味で注目すべき石である。次に第1トレンチから黒曜石塊が1個発見されたが、これは白い斑点のある縄島山産の黒曜石である。

さらに注目すべきは平たい灰青色に小さい黒点のある石（角閃安山岩）で作った道具で長さ8.5cm、幅5cm、厚さ0.7cmのもので、破片であるが片面に円形の1部を示す弧状の稜があり、稜から内側は中心に向って傾いている。もちろん人工によるもので、この段の弧形を円形であるとしてコンパスで延長すると直径は20.08cmとなる。これに外側が2.5cm幅のものが付くと珍しい皿形の器となる。

次には尖頭器である。これにも色々の種類があり、第1トレンチ出土の頁岩製のものは刃幅5cm、高さ2.2cmの扇形の尖頭器で、同じトレンチから出土した前掲輝緑岩製のものは刃幅6cm、高さ5.5cmのもので、これなどは完全な石器ということができる。（第6図参照）

2. 土 器

土器の破片は多数であるが、縄文式土器と弥生式土器、土師器および須恵器に分類することができる。

(1) 縄 文 式 土 器

縄文土器の破片は多数であるが、第1図の第1トレンチの東側セクションで示した地層によると、最も下底の粘土質黒土層に密着して見出されたもののが多かった。黑色、褐色を主とする土器で、無文のものが多いが、文様を有する破片は第9図に示したようなものである。これらのうち3列上段にある口縁部破片は、口縁が低い富士山状に突起しているいわゆる西平式土器の破片である。この土器は口縁部が「く」の字形の断面をなして大きく曲がり、その頂点にV字形の切込みがあつて逆S字形文、縄文や回線文を施こし、「く」字形に曲った首部に第9図の1列1、2に見えるような押点文が施されており、首部から胴にかけては連点文や平行沈線文、磨消縄文を描くものが多い。だから第9図の1列下2例、2列のもの、3列の下2例などはこの種の土器の文様と思われる。これらの文様は輪ヶ崎式にもあるもので、縄文後期の土器である。第9図の左端にある1例は黒褐色の破片で表面に細い平行線文があるが、破片が余りに小

さいので明瞭でないが、この種の文様は後、晩期の土器に多いようである。これらによって知られることは、この遺跡の縦文土器は後期のものを主とするということである。

(2) 弥生式土器

この遺跡で採集した土器片の大部分は弥生式の土器片で、全体の70%ぐらいを占めるのではないかと思われる。しかしその大半は無文のものであった。器形は壺形から壺形、高坏、坏その他で、大形のものから極く小形のものに至るまであり、底部の破片も若干あるが、みな小さい平底または上り底で、中期から後期の土器の破片であることが知られる。文様は第10図に示したもののが代表的なものである。1列の上と下は刷毛目文、中の2例も腹部は刷毛目、左端は調整した刷毛目である。口縁も単純である。また高坏は脚部に円孔を穿っている。

(3) 土師器

土師器は前に触れた錐（施）形の完形品1個のほかは地下式古墳の跡と見られる所から出土した小形の高坏の脚部破片2個（黄色でどちらにも円孔の半ばが残っている）と他に黄色の薄い破片1個があるのみである。しかしこの完形の壺形土器はこの遺跡で発見された唯一の完形遺物であるので、やや詳しく説明しよう。

この土師器は口径12cm、高さ4cm、平底で、底径7.5cmで底面は糸切底である。口縁は図版2(1)および実測図（第7図）に見られるようにやや外に拡がっている。糸切底の外側に斜めに1cm幅のヒビ割れ状の部分をめぐらし、それから斜めに上って口縁が外反する形で、全体に優美な姿である。内側の底部は平底ではなく、中心は窪んでいるがその周囲がドーナツ形に隆起しており、さらにその外側は親指を廻したような幅で深く窪んでいる。底の外側の糸切底をめぐる皺状の亀裂は製作の際に、内側の底を膨らませるために親指のような物で押さえたため、この部分の外側の粘土が伸びてヒビ割れ状になったのではないかと考えられる。しかしこのような内側の底の調整はこの土器の内側を非常に高雅な形をしている。色は内側は褐色であるが、1面に深い黄色の斑点がついていて「鹿の子姫ら」のような観を呈しており、外側の口縁部の半ばは黒い煤が塗られたようについていて、他の半分は煤けており、壺状の黒い所の下から底面にかけては赤褐色で、朱を塗ったような赤い色が淡く残っている。このように器形が普通の器と違っているとともに、色彩がまた甚だしく異色を呈している。

先ずこの土器で第1に注目されるのは糸切底（第8図参照）を有していることである。糸切底は土器をクロの上で廻しているとき廻転中に糸で切り離すときに出来る貝殻状の痕跡である。そしてわが国の土師器製作に糸切底が行われるようになったのは7世紀以後であると云われている。^①われわれは前に述べたように、この土師器が、ボラ層の下に伏せられた状態で発見されたのを思い出す〔図版1(1)の土師器と左方のボラ層の位置参照〕のである。このボラ層を形成した鷲島山の噴火は何時であったか明らかでないが、鷲島山の噴火が最初に史に記されているのは「統日本紀」天平14年11月10日（742）の記事であることも一応考慮に入れる必要があろう。

次に注目されるのはその色彩である。特に私はその外側の色彩に注目したい。前に述べたように外側には口縁の半ばに沿って黒色の雲状の煤がある。またその下には朱を塗ったような赤い色が見られる。もち

ろん発掘後水洗いされたから色は淡くなっているが、赤い色も土器本来の色でないことは明瞭である。土器の表面に赤色塗料や黒色塗料を塗ることは縄文時代以来行われてきたが土師器の内面や外面に塗料を塗ったものを朱塗土師器（または丹塗土師器）黒色土師器と呼んでいるが、小笠原好彦氏によれば、丹塗土師器に塗る顔料としては一般に鉛丹、ベニガラ、赤土などで、黒色土器は土師器の表面をいぶすことによって炭素を吸着させたものと思われるという。そしてこれらの土師器の出土例は九州では福岡県甘木市丸山2号墳から丹塗の碗（須恵器）が出土したのが1例であると記述されている。そうするとこの土師器は系切底の例としても、または丹塗土師器、黒色土師器の例としても注目すべき遺物であると言わねばならない。

(4) 須 惠 器

須恵器は第4トレンチの第11区から発見された壺がただ1個あつただけであった。この壺は1個の約半分であるが、中心部と口縁部があるから全形を推定することができる。それによると完形は口縁の直径14cm、高さ4cmで、第4トレンチでもかなり高い所から出土したから余り古いものではないことが知られる。

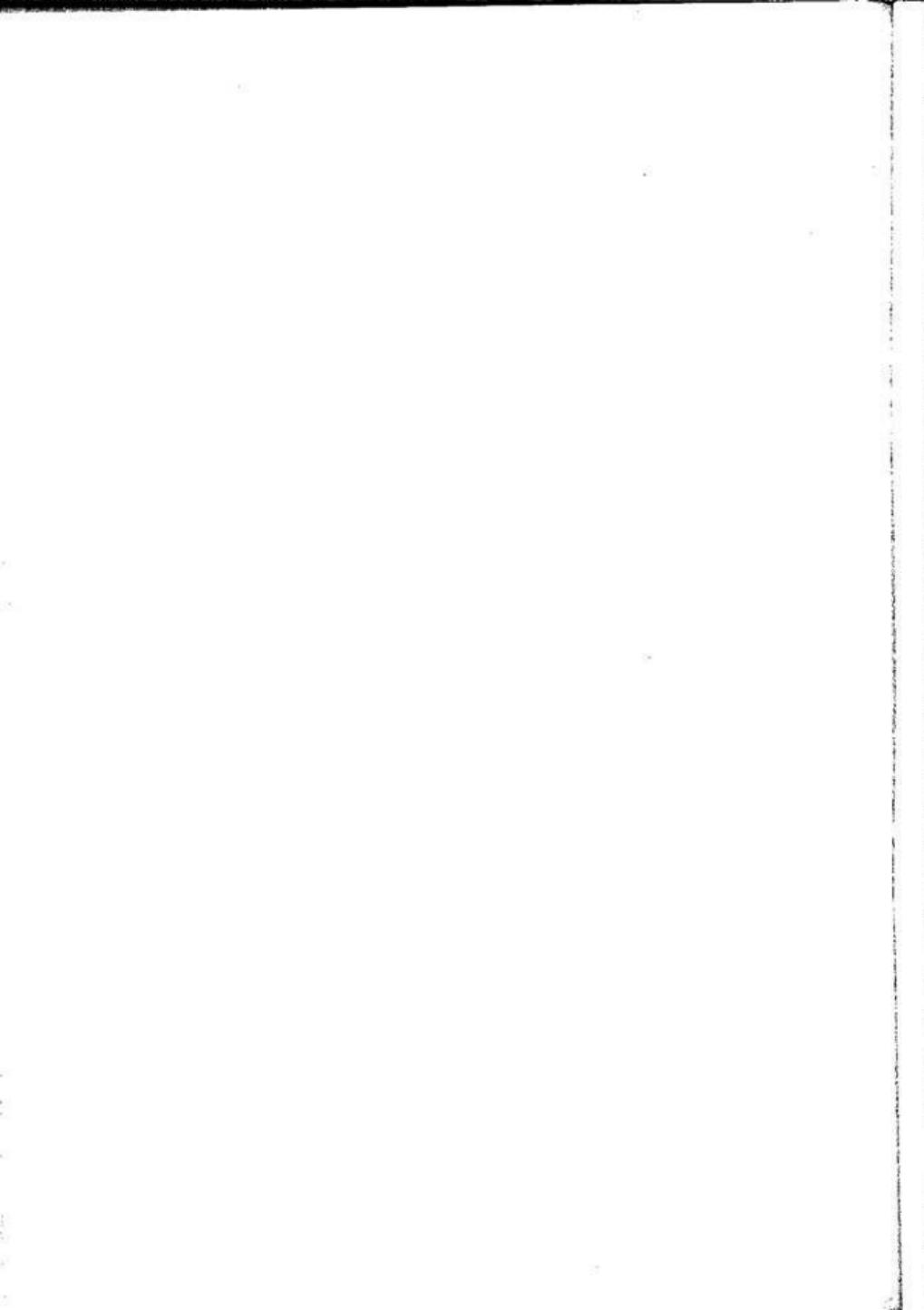
註① 日本考古学協会編「日本考古学辞典」

② 小笠原好彦氏「丹塗土師器と黒色土師器」（考古学研究、18巻2号、18巻3号、1971）

第3章 結 言

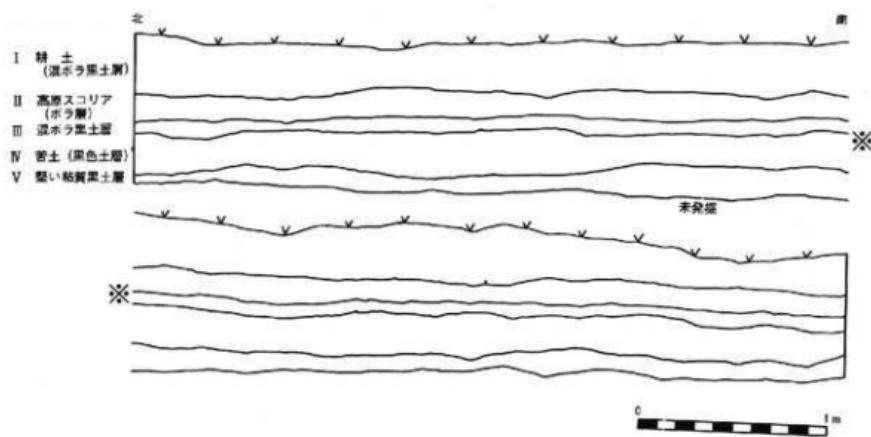
以上第Ⅰ遺跡の発掘の結果を報告したが、この遺跡は広大な面積の台地上に5本のトレンチを入れて調査しただけであったから、余程の偶然でもなければ、住居址等に掘り当てる可能性はなかったのである。今にして思えばこのように丘地の下にある台地では、丘地の麓に当る所に住居が営まれることが普通であって、丘地の麓部は丘を背後にするから陽当たりがよく、風を除ける利点がある。しかしこの第Ⅰ遺跡では、そのような麓部には既に人家があつて発掘することができなかつた。これらのトレンチでも人家に近い所に土器破片が多いということでも、このことは証拠立てられたのである。

発掘した土器片は多數に及んだが、破片が小さく、散乱していたので、これらの破片には、これを復原すれば1個の土器となるものが多い。従ってこれらの土器片も、これを復原すればその個数はあまり多くはないものと考えられるのである。しかしここに縄文時代後期の遺跡や弥生時代後期の遺跡が存在したこととを確認することができたし、また古墳時代後期から奈良時代にかけての遺品である珍らしい蝶形土師器の完形品を発見したことは大きい収穫であったと思う。この物は古代日向の文化を考察する上においても重要な遺物であつて、このような物が、野尻町の柿川内というこのような所に存在したことも重要なことで古代の交通路を考える上にも見落すことのできない遺品であると思う。要するに第Ⅰ遺跡が縄文の古い時代の発見であったのに対し第Ⅱ遺跡は考古学的には新しい時代の発見であったということができるであろう。

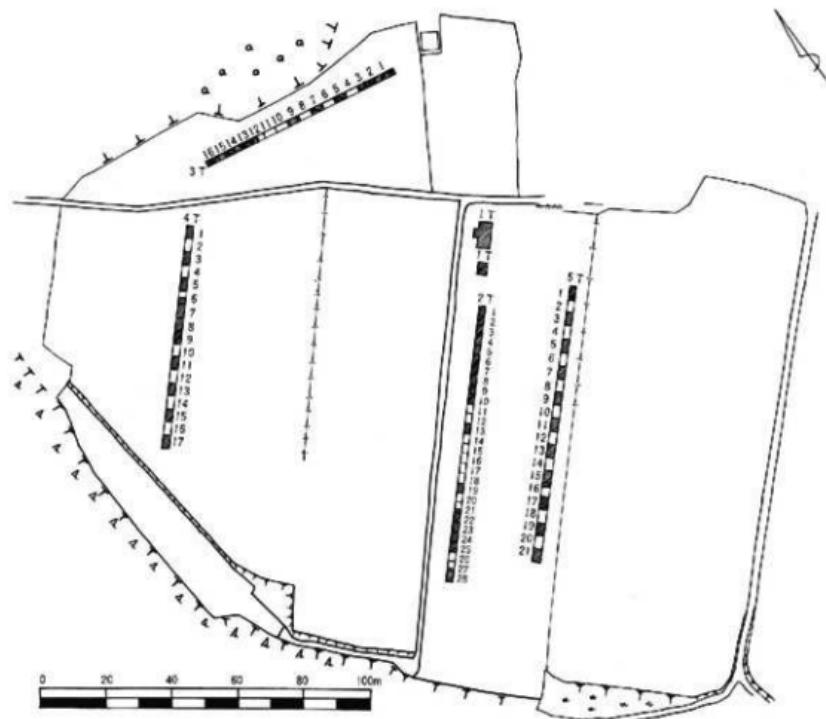


柿川内第Ⅱ遺跡
図及び図版

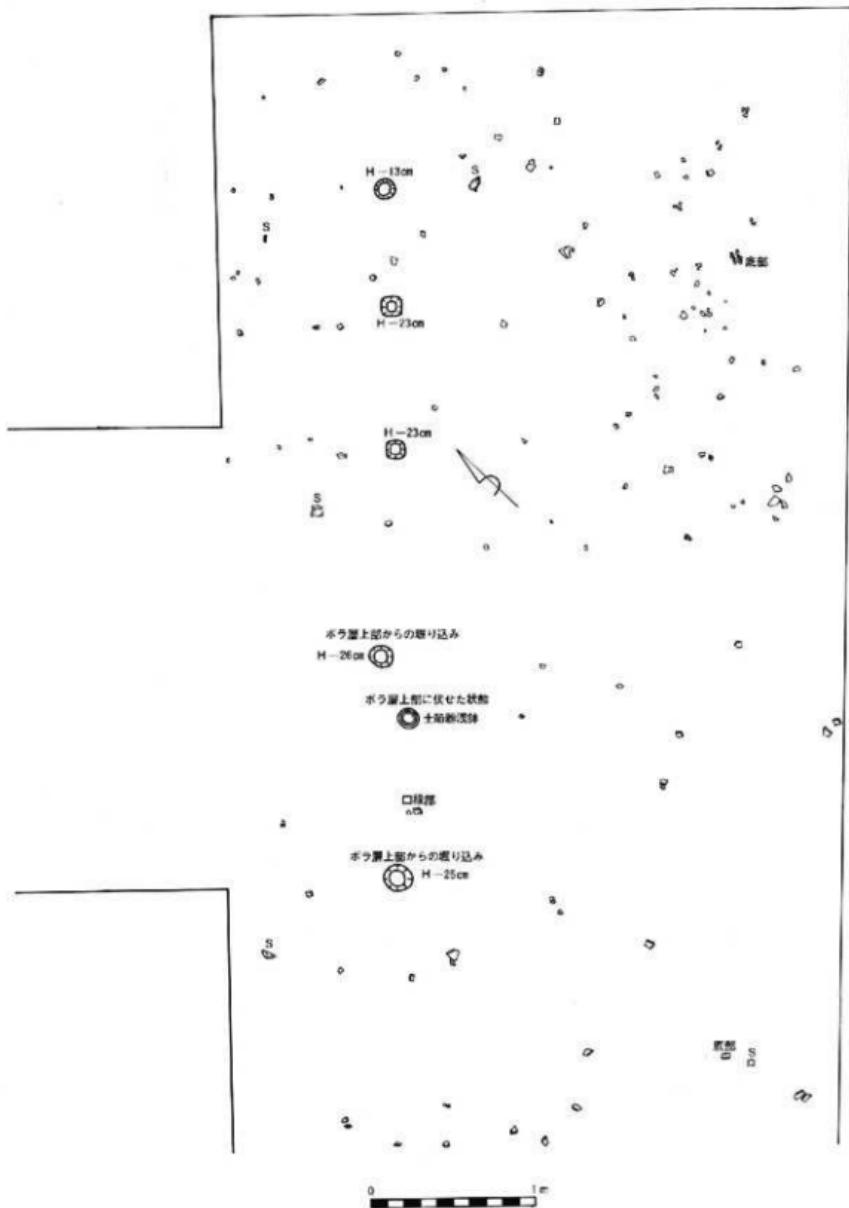




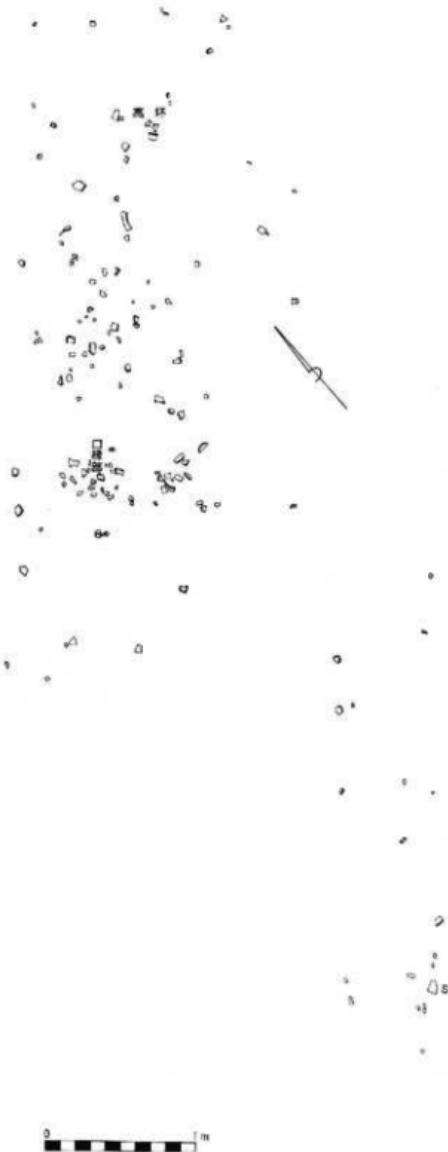
第1図 第1トレンチ北寄・東面土層図



第2図 柿川内第Ⅱ遺跡地形図



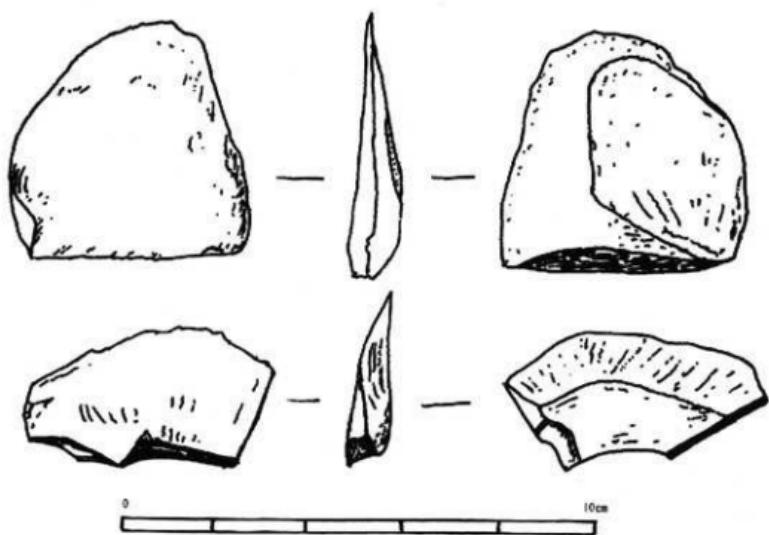
第3図 第1トレンチ北寄・土器分布状況実測図



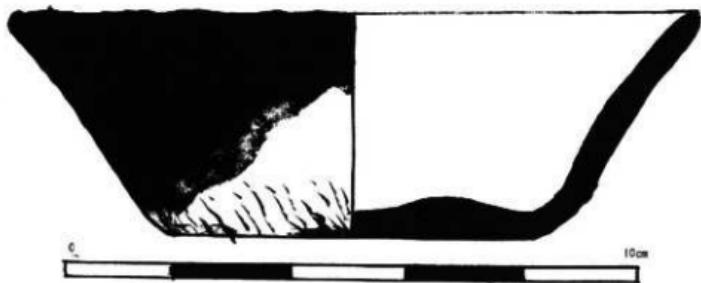
第4図 第2トレンチ15. 16区・土器分布状況実測図



第5図 第4トレンチ・6区南部～7区・土器分布状況実測図



第6図 剥片石器実測図



第7図 盤形土器実測図



第8図 盤形土器の糸切底拓影



第9図 縄文式土器の文様拓影



1



A. 2



2-6.7

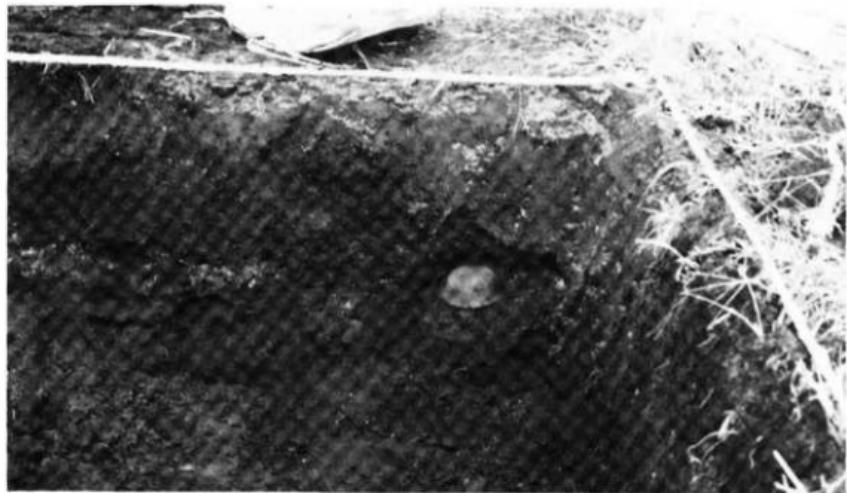


2-6.7



2-18.16

第10図 弥生式土器の文様



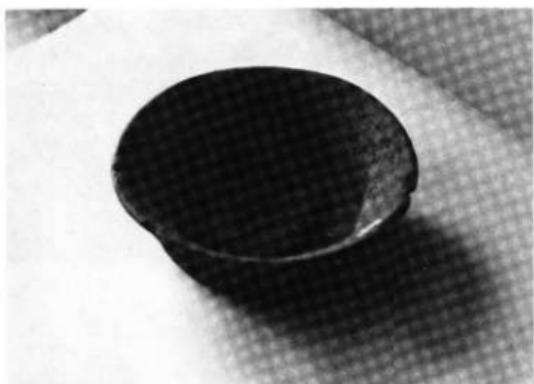
▲盤形土器の在る状態
(左方ボラ層がある)



A 区に柱穴のある状態▶

図版1 第1トレンチ出土状況

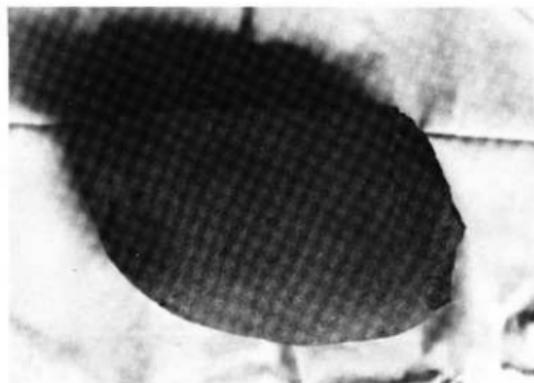
◆ 蛇形土器



高坏破片▶



◀ 平たい石



図版2 出 土 遺 物



▲第4トレンチ6・7区に土器片のある状態

▼地下式古墳のある状態



図版3 第4トレンチ及び第2トレンチの状況

瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備
事業埋蔵文化財発掘調査報告

柿川内第Ⅰ・第Ⅱ遺跡

発行 昭和 52 年 3 月 31 日
宮崎県教育委員会

編集 宮崎県教育委員会文化課
印刷所 愛文社 写真印刷